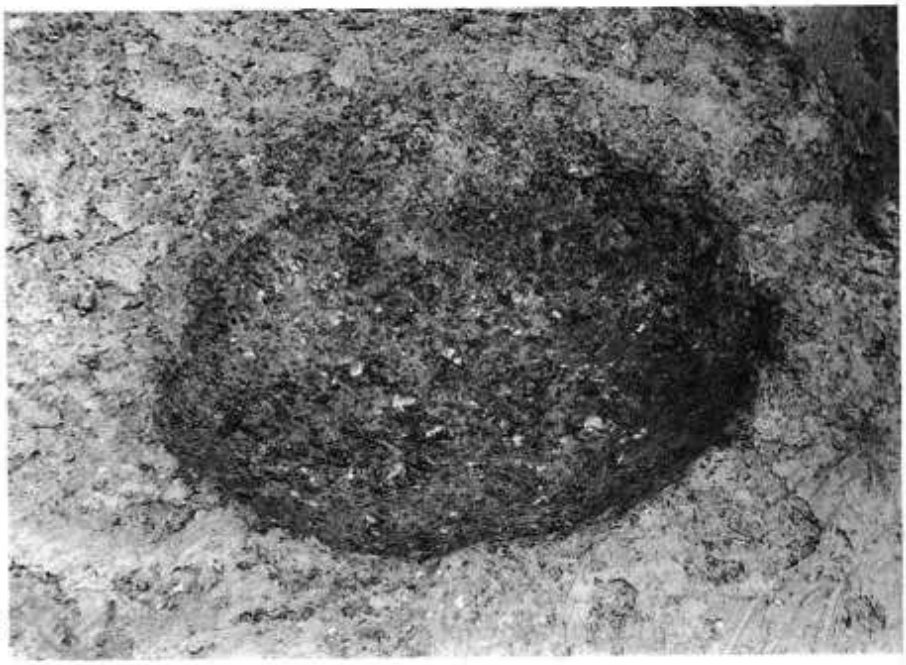
H－2・I－2区地山面
ピット群とSK－05
（西から見る）



H－2区SK－05
掘り切り後

H－2区西壁

A－2～E－2区
調査後全景

C－3区SD－02
遺物出土状況

D－3区SD－01
石除去前

C－3区土器溜り1

C－3区SB－01
P1土器出土状況

C－3区SB－01
P6土製支脚出土状況

C－3区SB－01P9

C－3区SB－01・SD－02

D－3区SD－01・SK－12
完掘後（西から見る）

C－3区SK－15断面

C－3区SK－16断面

C－3区SD－02粘土出土状況（後方はSK－16）

C－3区土器溜り2(1)断面

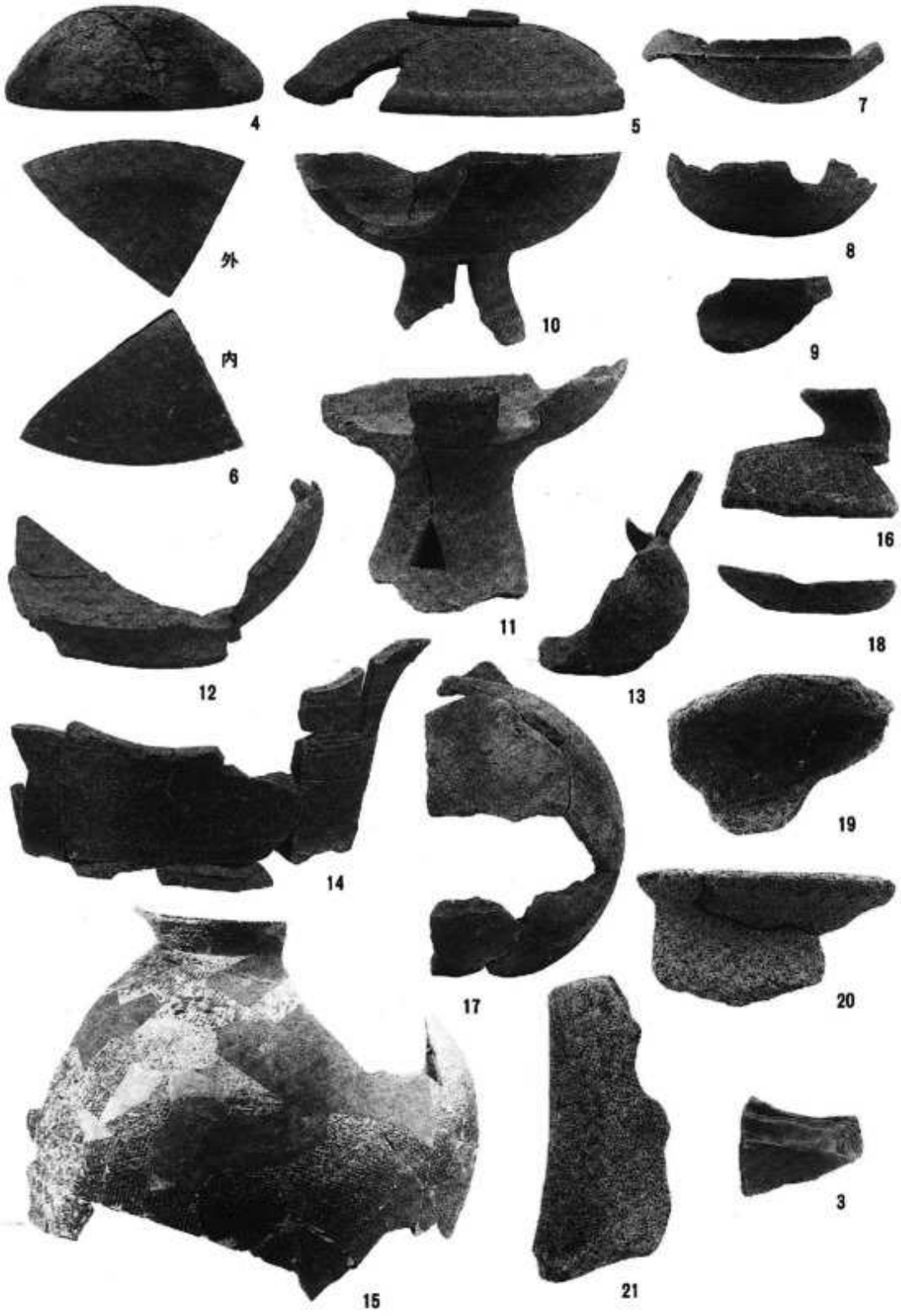
C－3区土器溜り2(2)
掘り切り後

C－3区SB－01・SD－
02・SK－15・SK－16
完掘後　(西から見る)

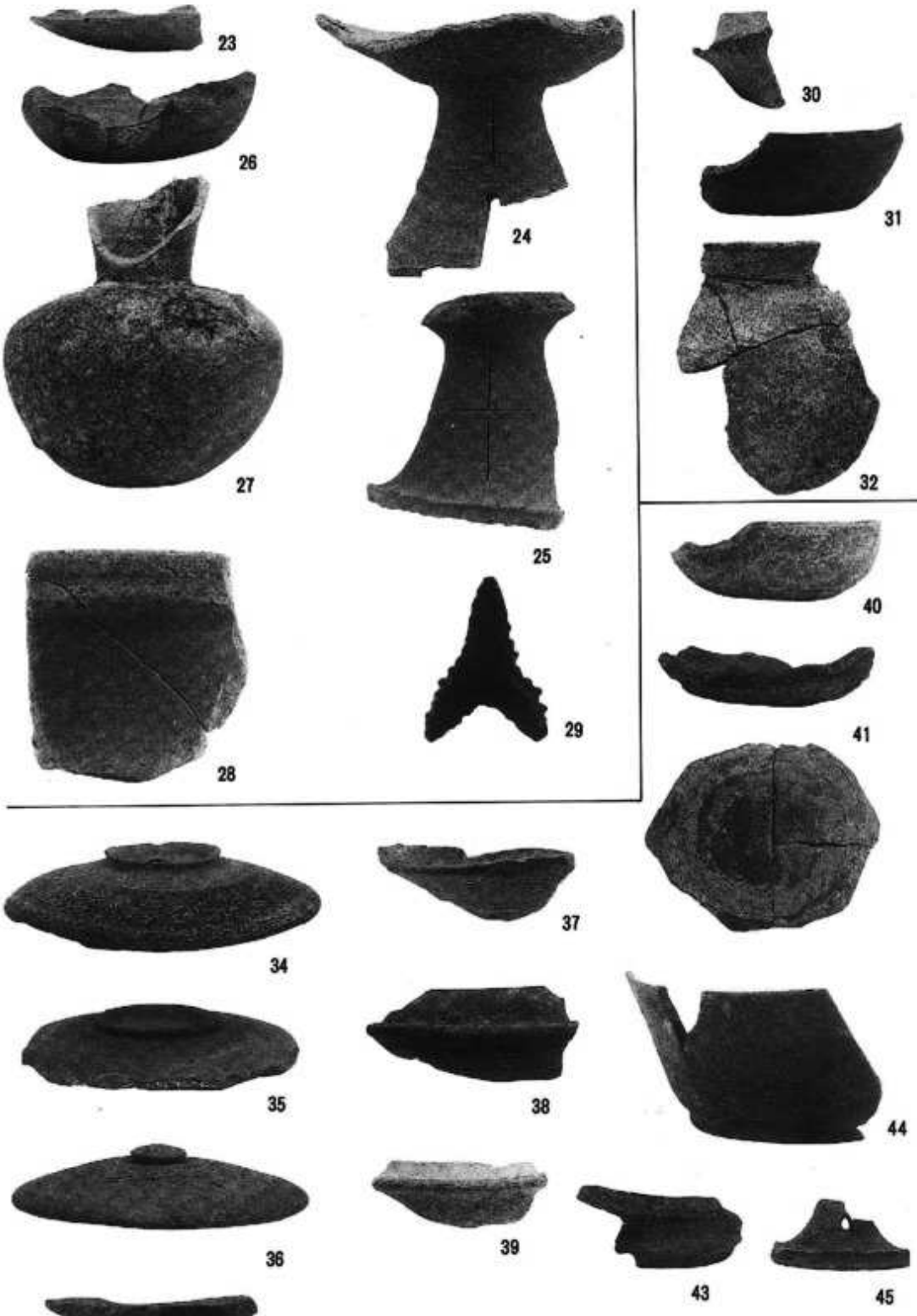
昭和61年度発掘調査風景
（遺構実測作業および
G－3区設定作業）

E－3区調査後全景

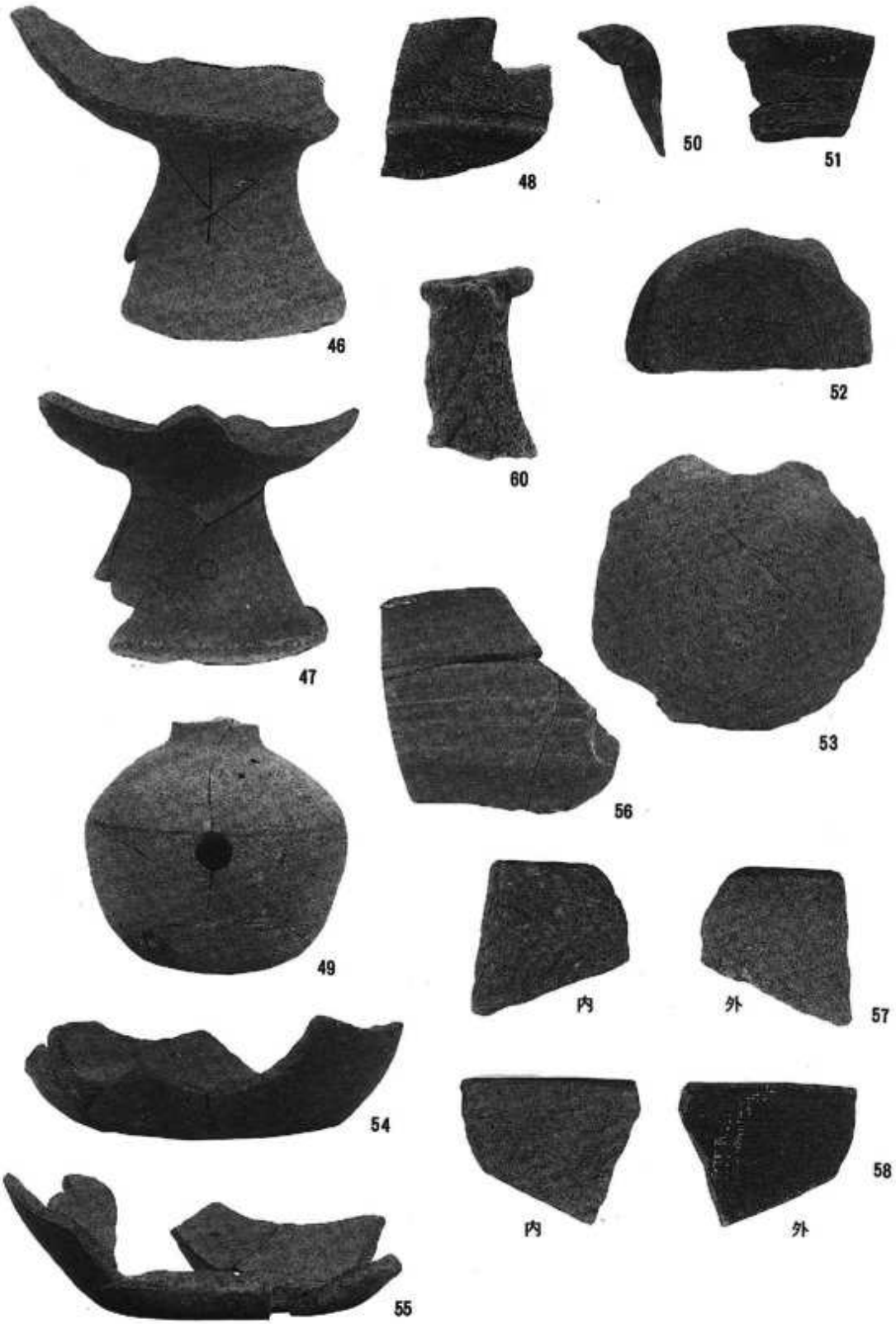
G－3区調査後全景



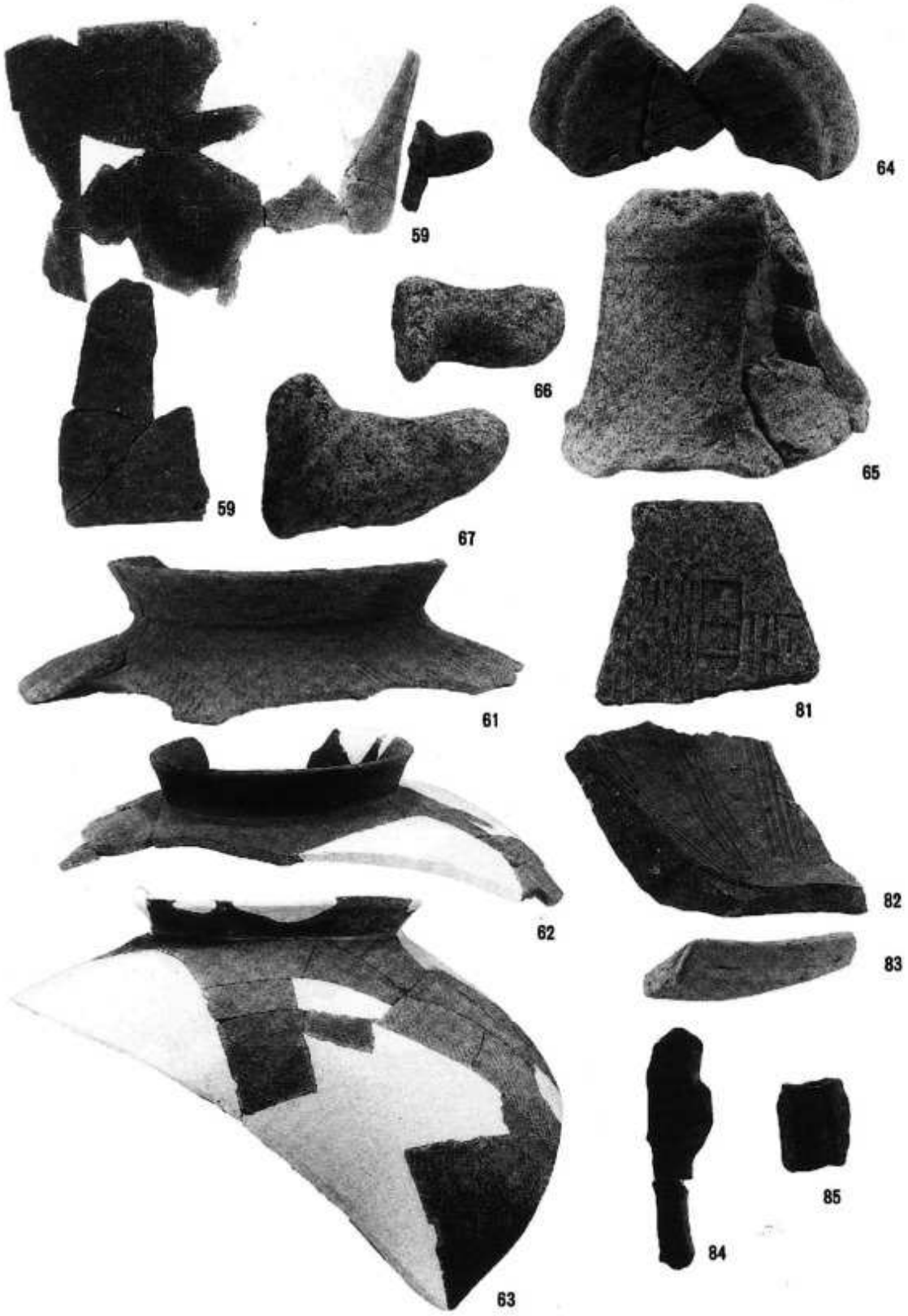
A－1～C－1（東）区第1遺構面上および覆土内出土須恵器・土師器・磁器



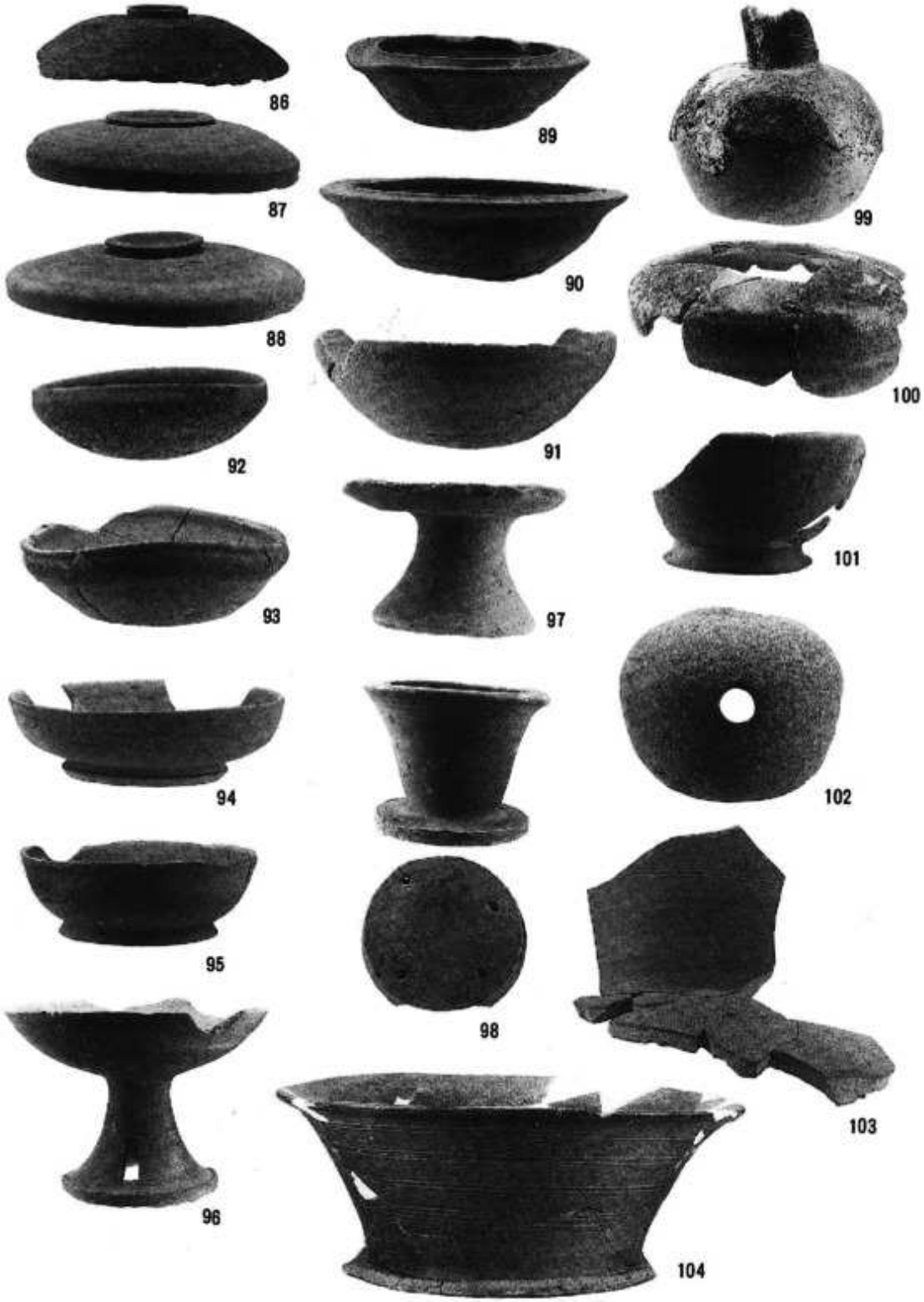
A－1～C－1（東）区第2遺構面上および覆土内出土遺物（上段左）
〃　第3遺構面覆土内出土須恵器・土師器（上段右）
〃　堆積土層内出土須恵器（1）（下段）



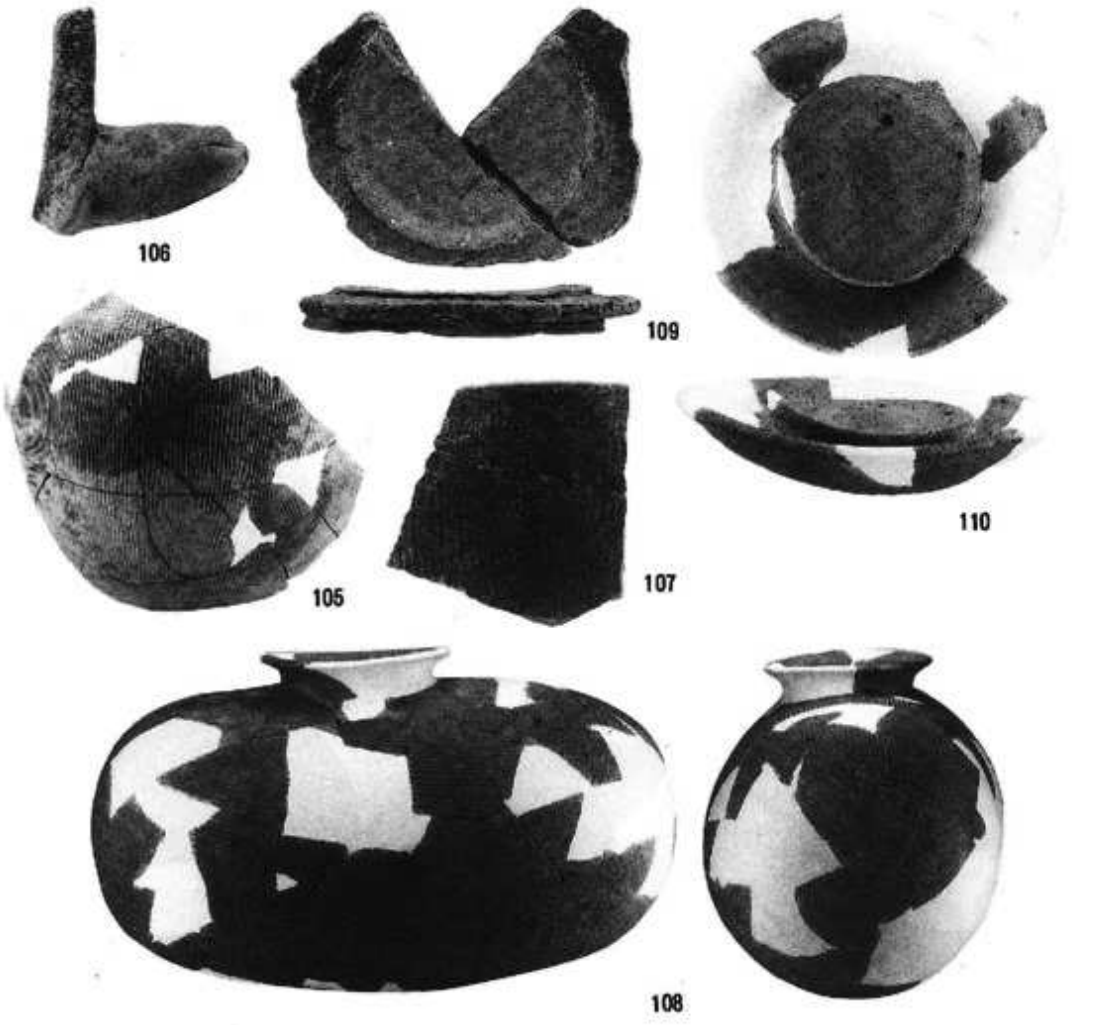
A－1～C－1（東）区堆積土層内出土須恵器(2)

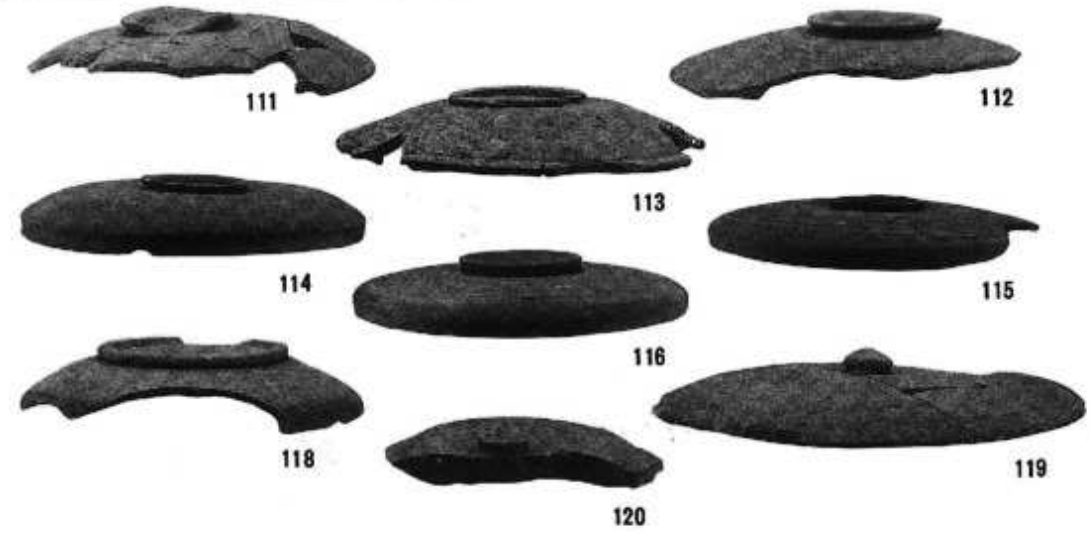


A－1～C－1（東）区堆積土層内出土遺物

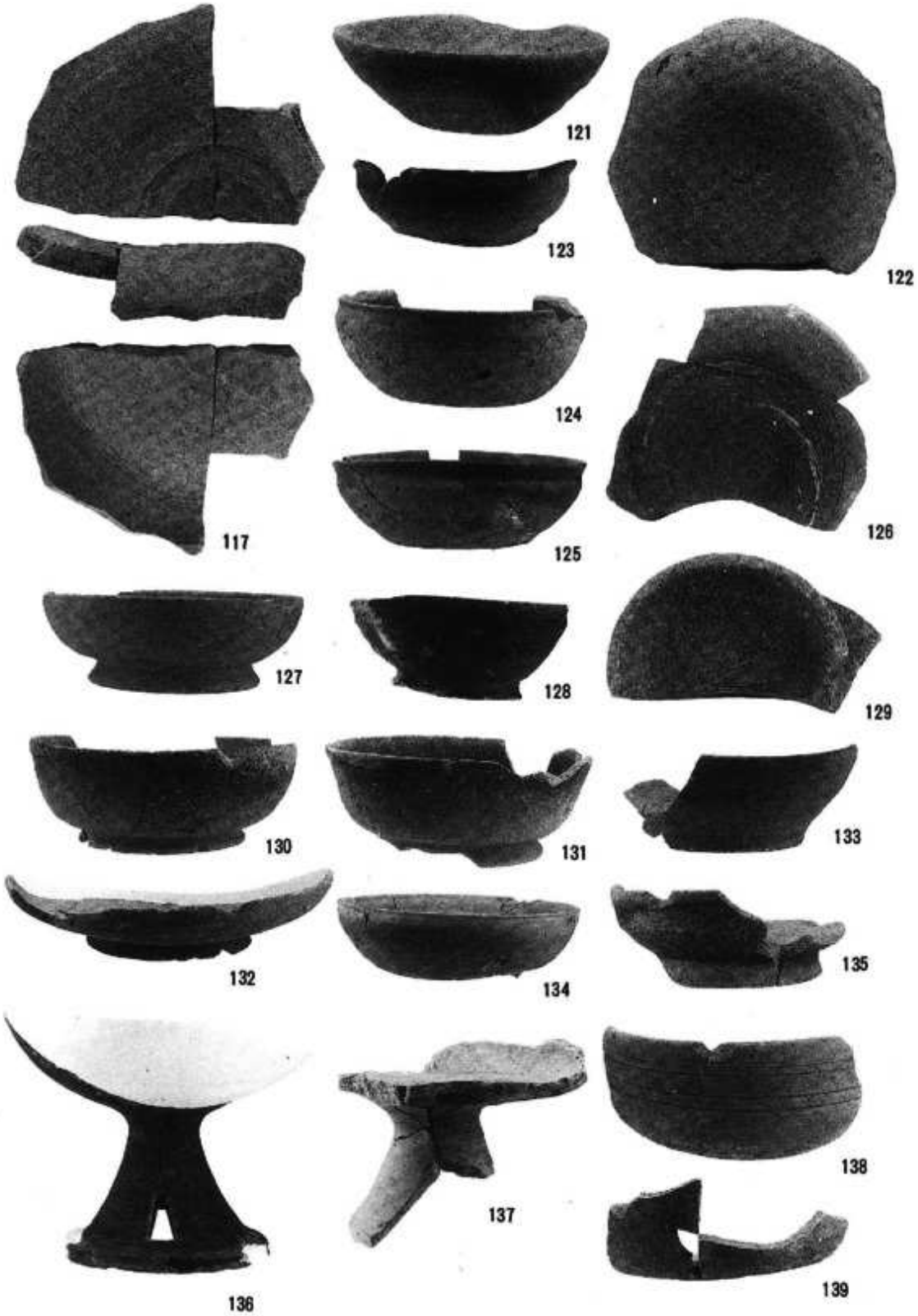


C－1（西）～E－2区第1遺構面覆土内出土須恵器(1)

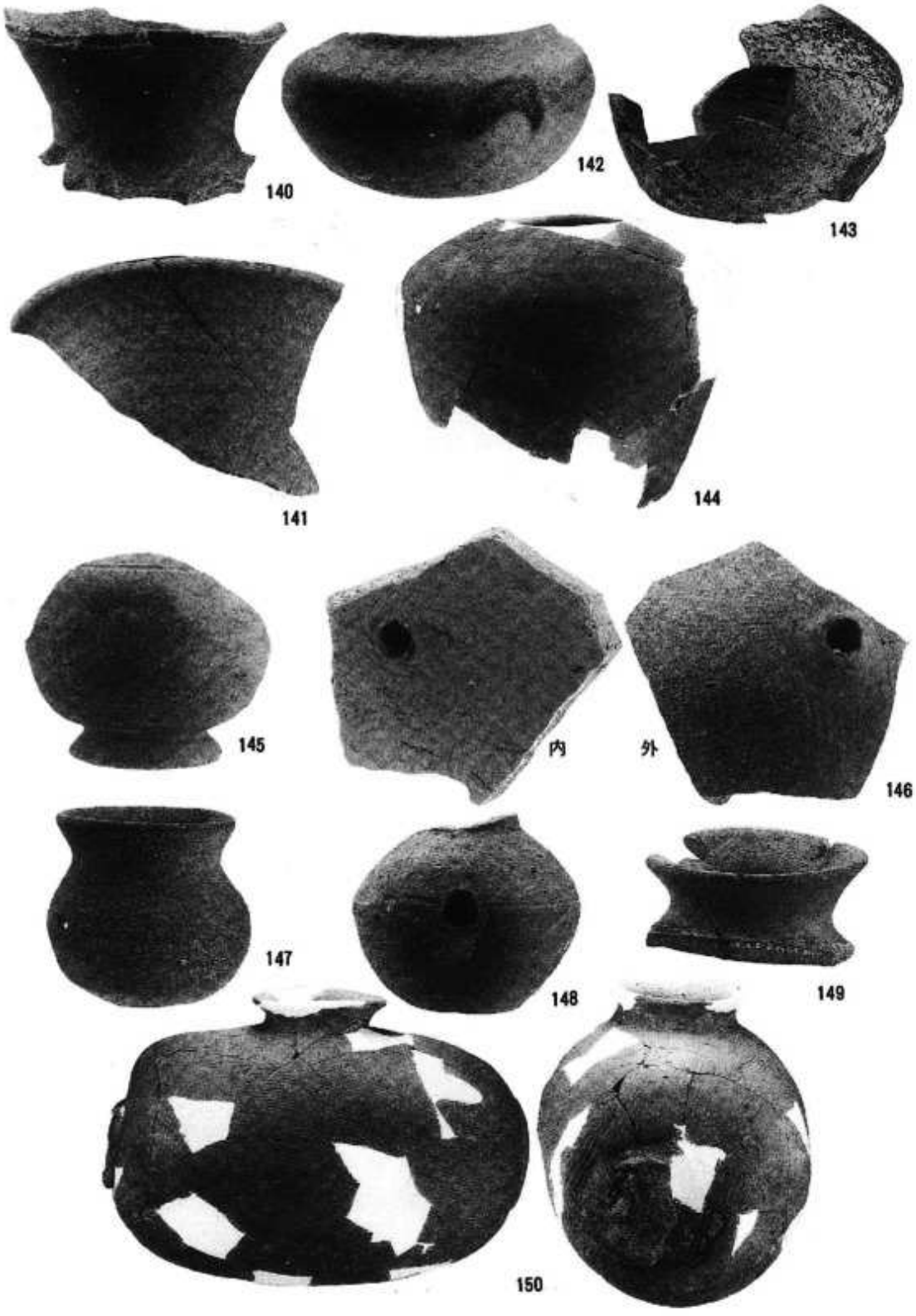




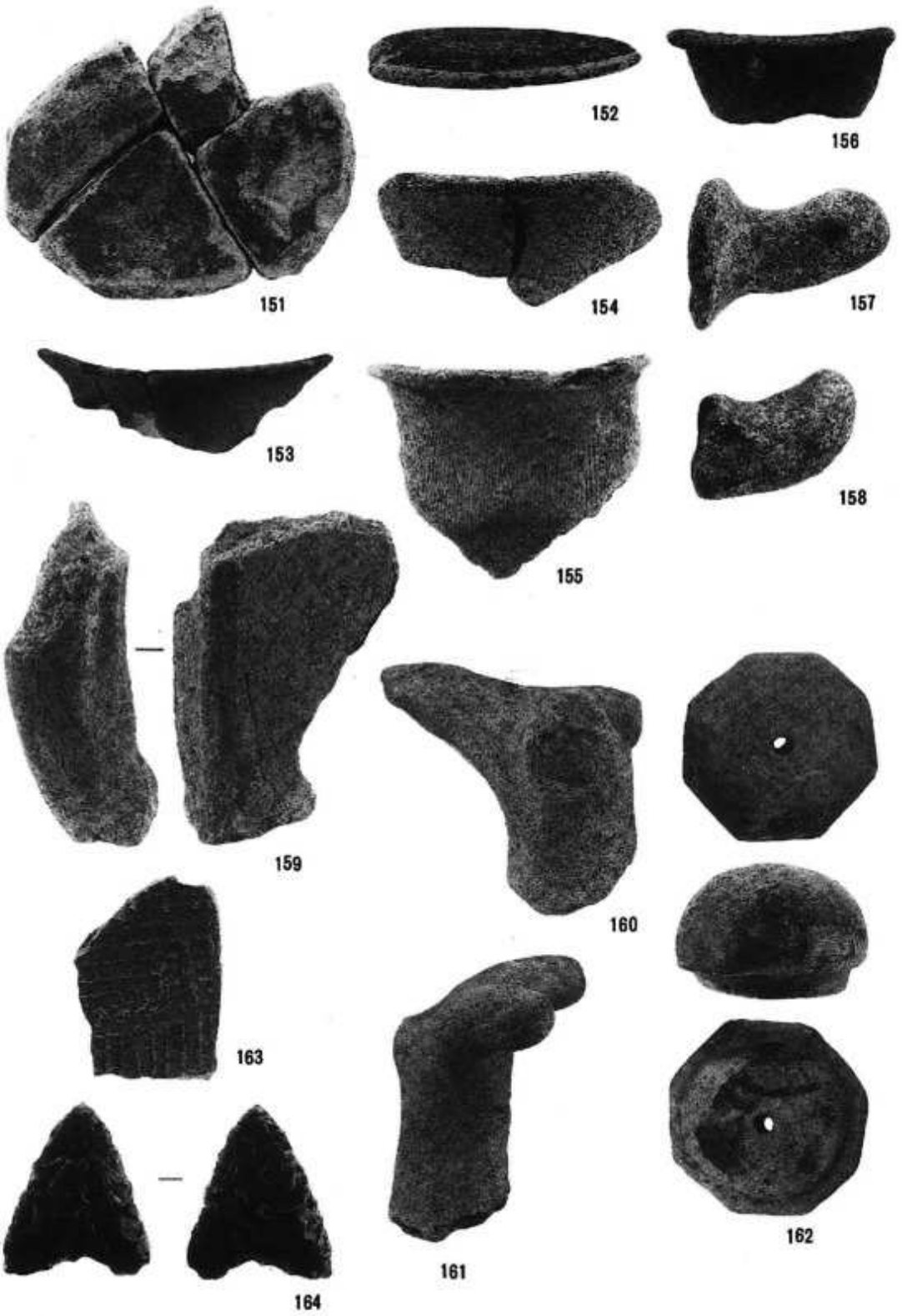
C－1（西）～E－2区第1遺構面覆土内出土須恵器(2)（上段）
〃　　第1遺構面上出土須恵器(1)（下段）



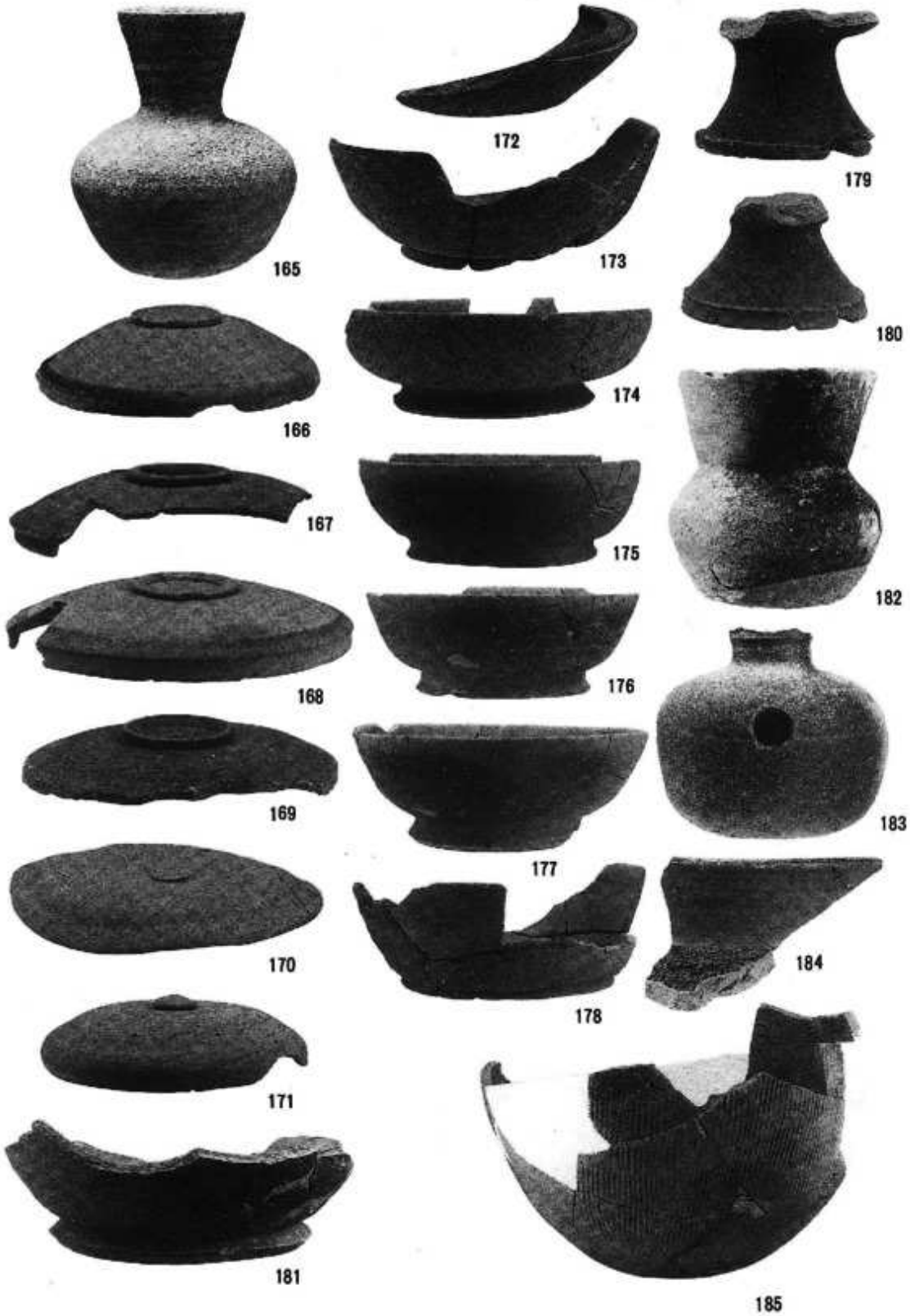
C－1（西）～E－2区第1遺構面上出土須恵器(2)



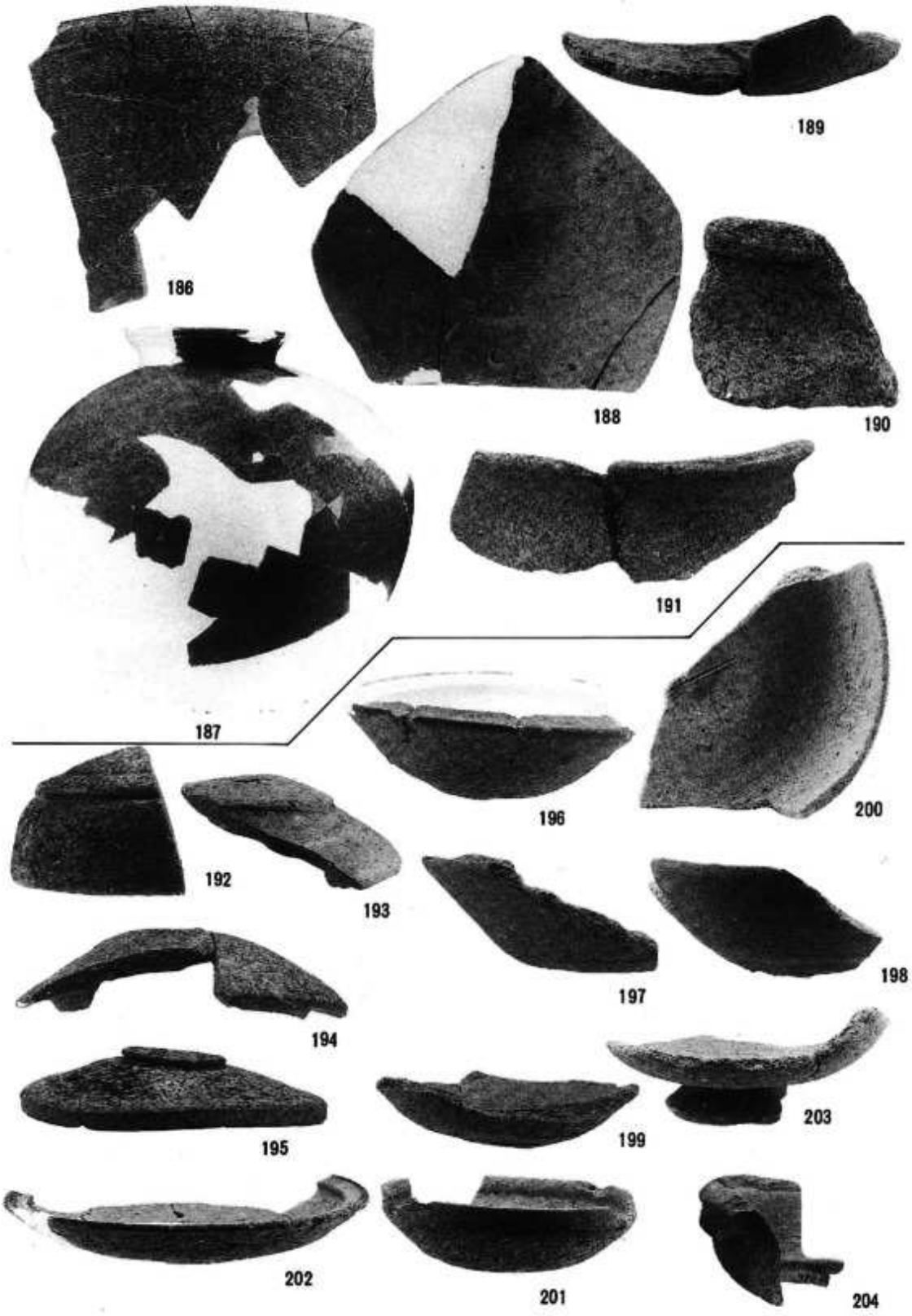
C－1（西）～E－2区第1遺構面上出土須恵器(3)



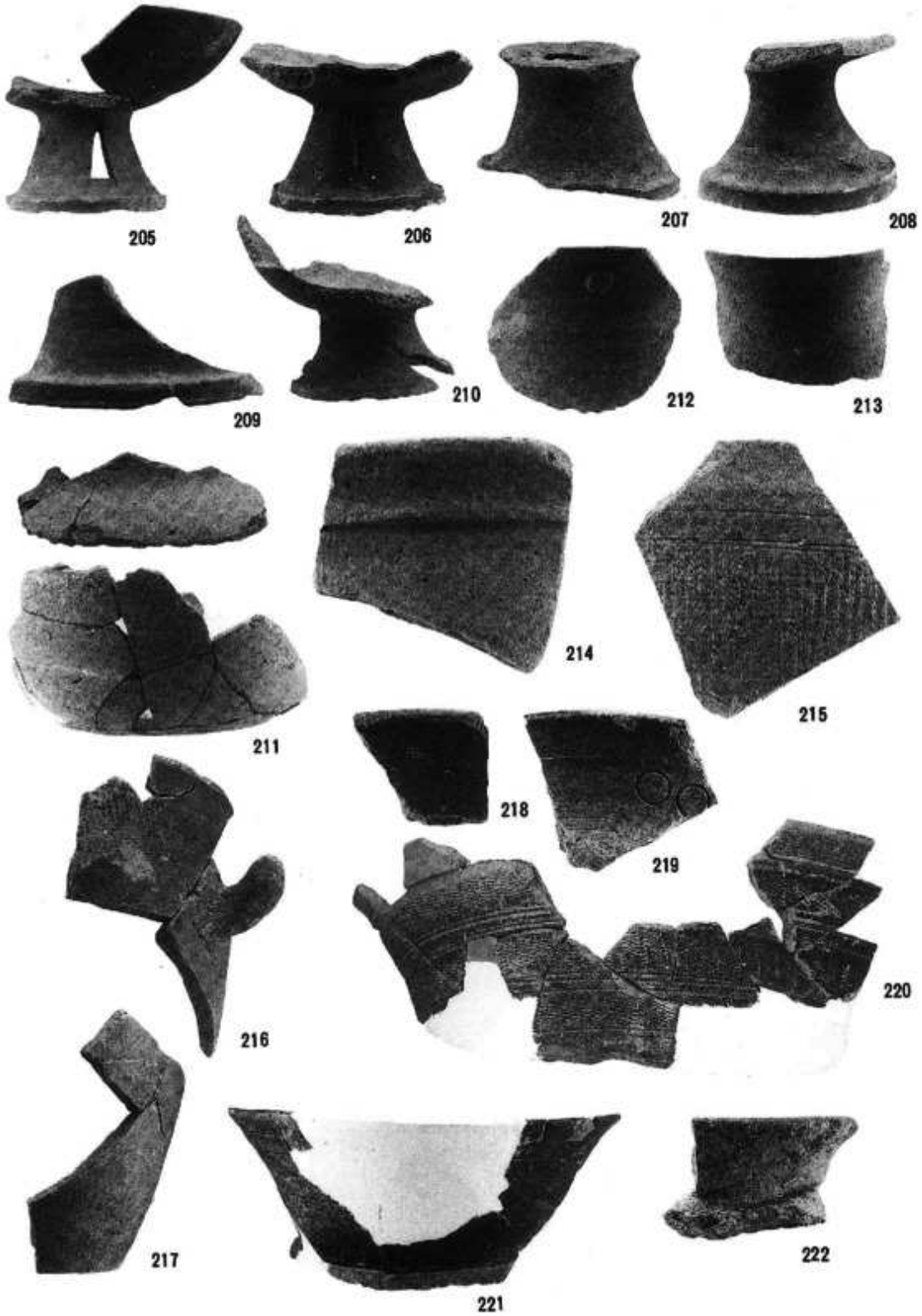
C－1（西）～E－2区第1遺構面上および覆土内出土遺物



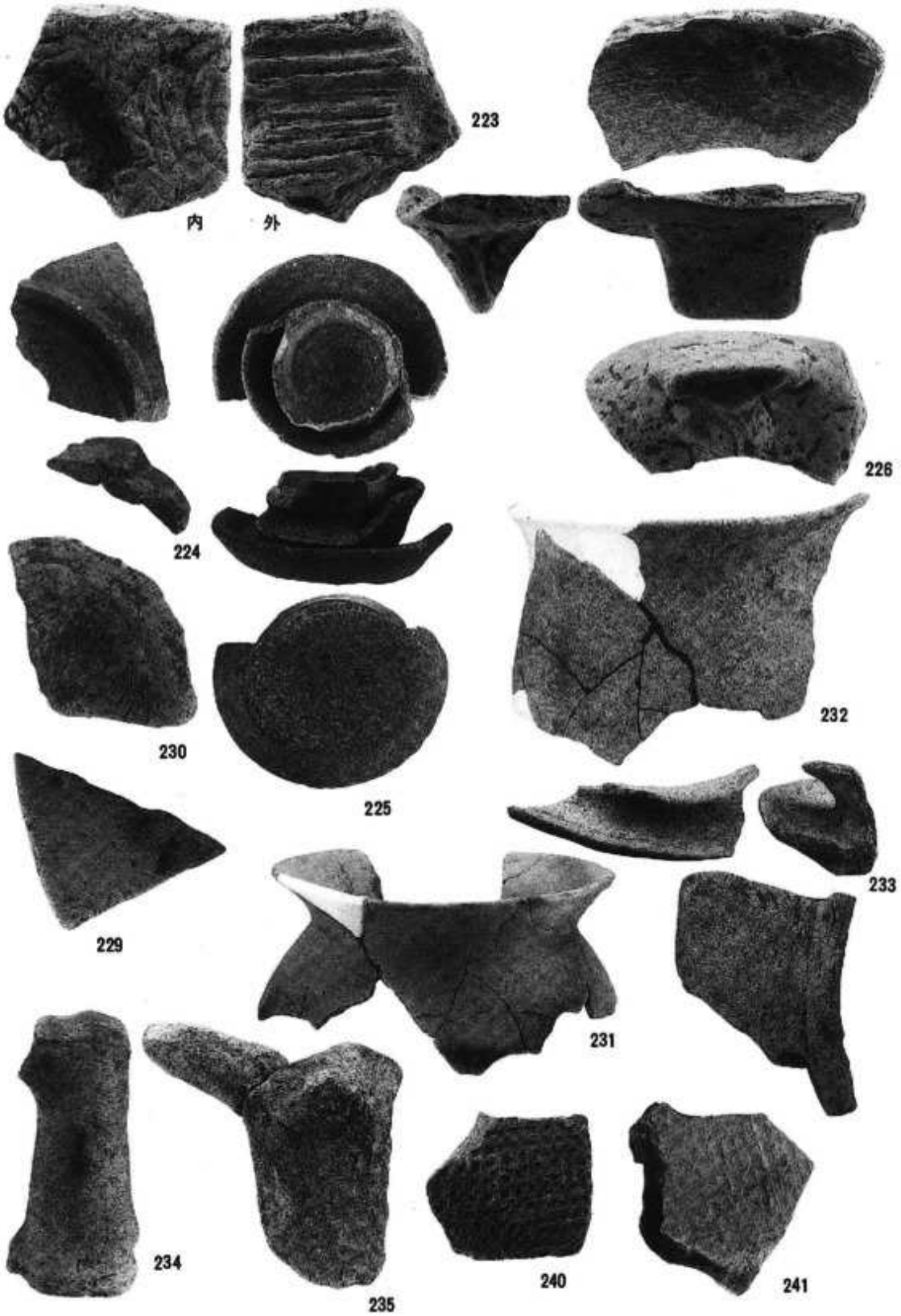
C－1（西）～E－2区
第2遺構面P1内出土長頸壺（165）および覆土内出土須恵器



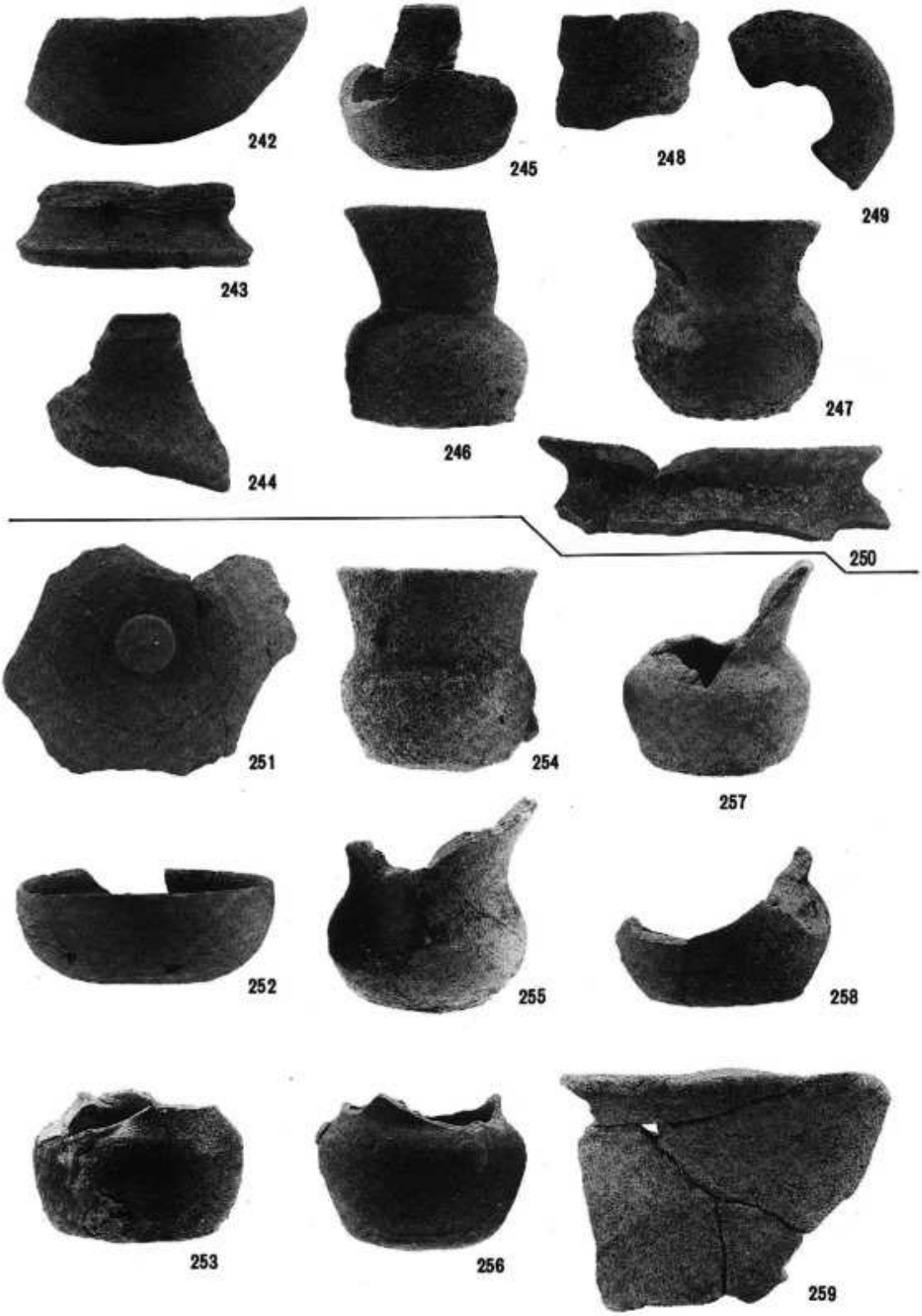
C－1（西）～E－2区第2遺構面覆土内出土須恵器・土師器（上段）
〃　　堆積土層内出土須恵器(1)（下段）



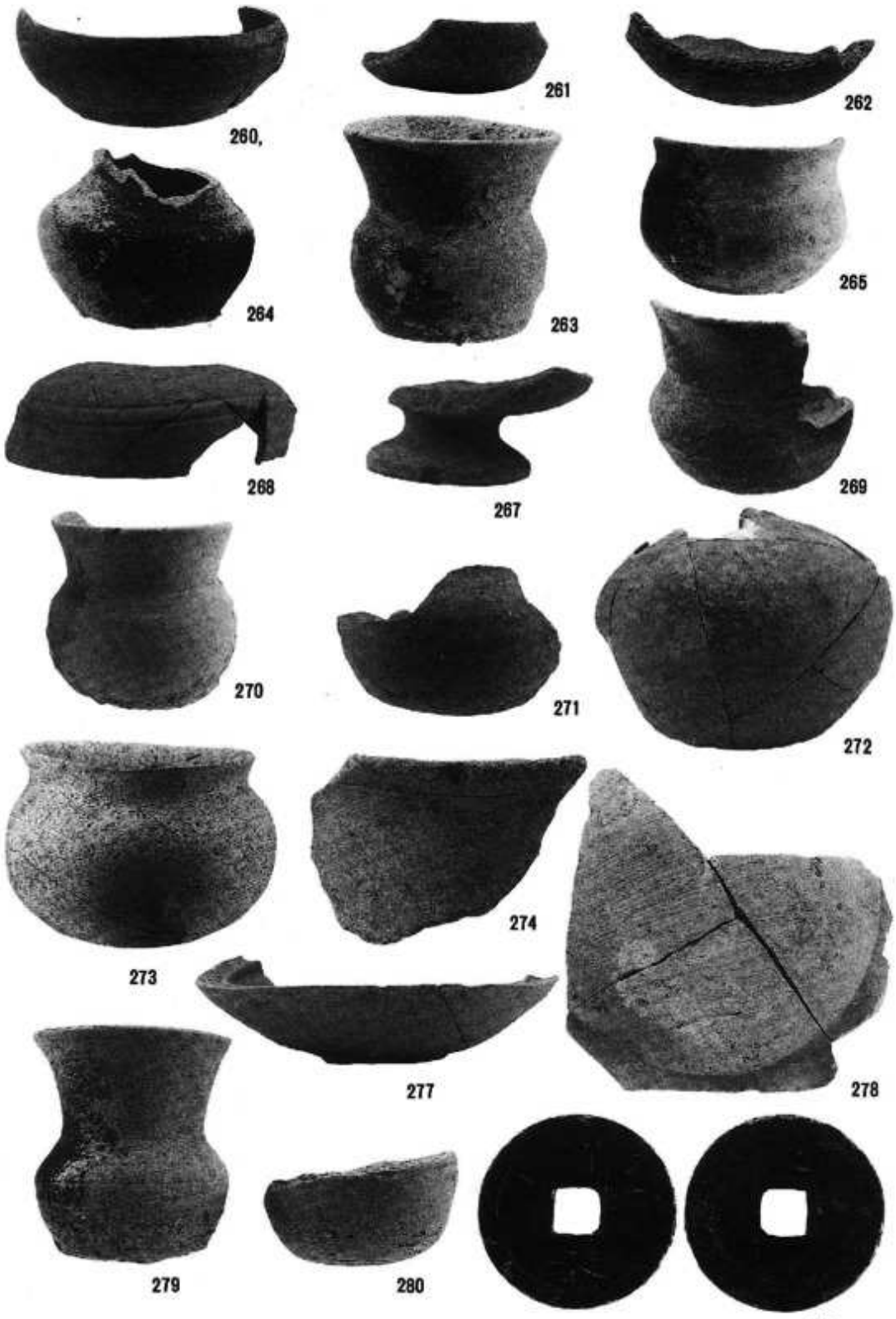
C－1（西）～E－2区堆積土層内出土須恵器(2)



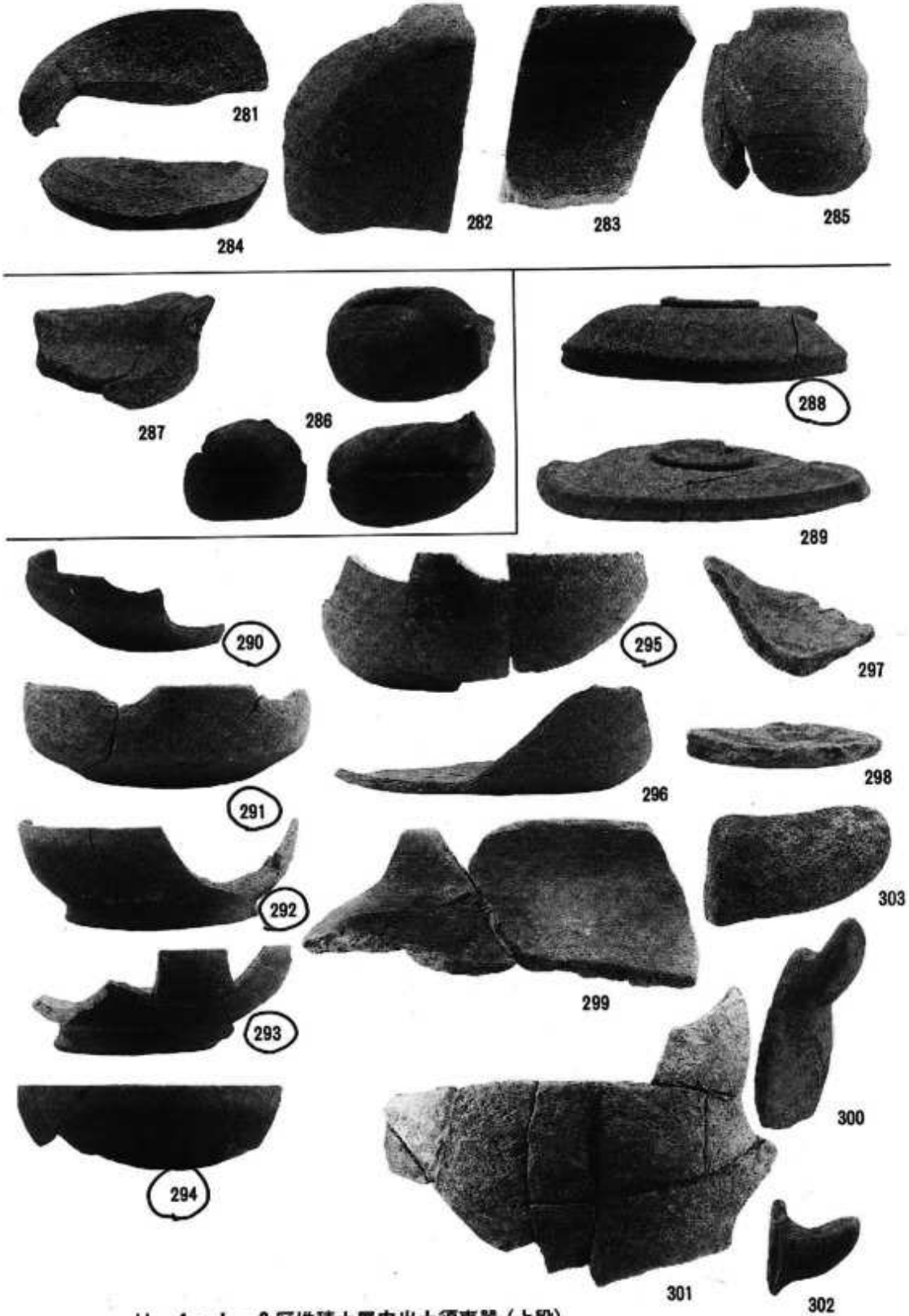
C－1（西）～E－2区表土および堆積土層内出土須恵器・土師器・陶器



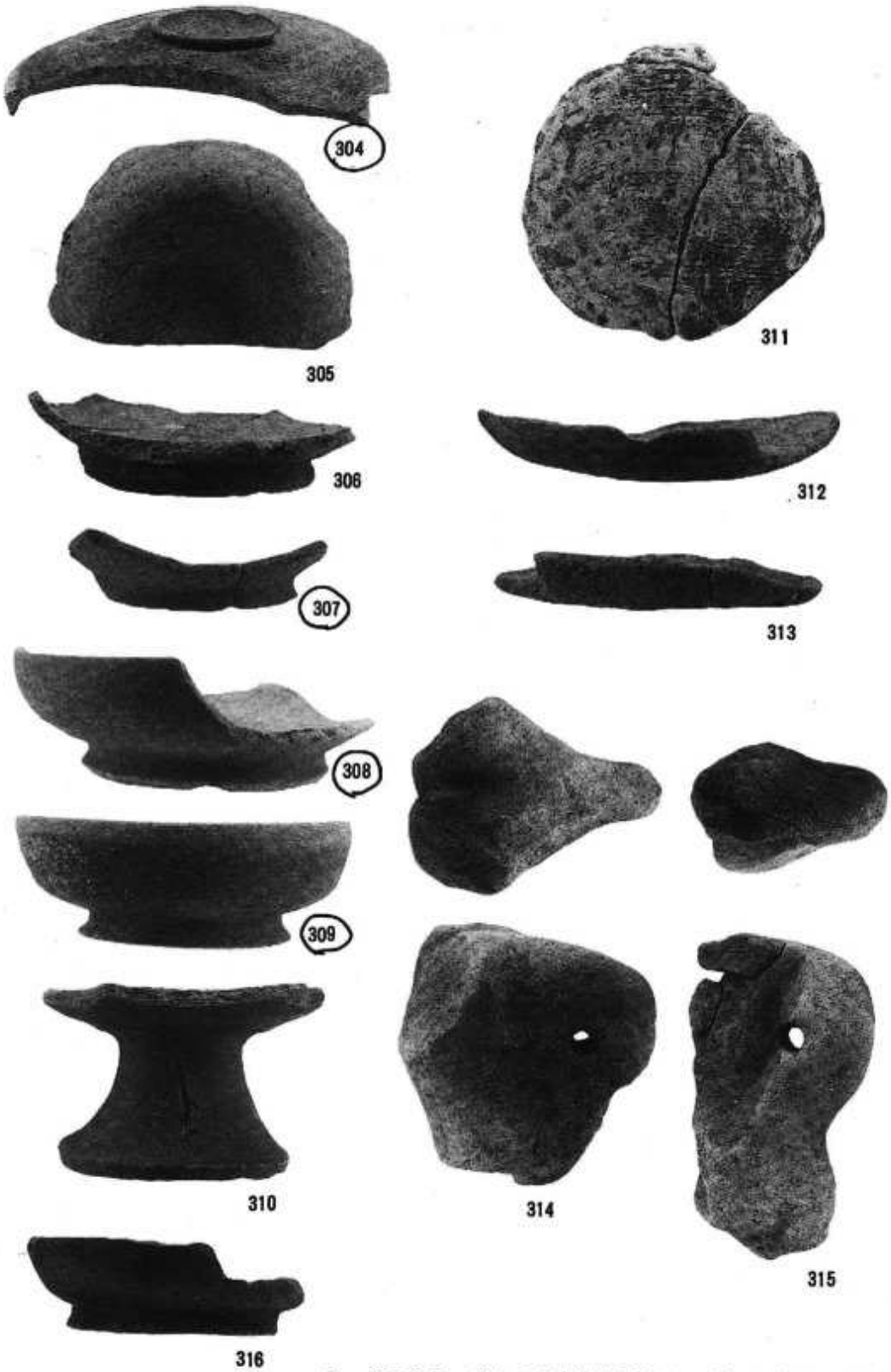
F－1～G－2区第1遺構面覆土内出土須恵器(上段)
〃　　第1遺構面上出土須恵器・土師器(下段)



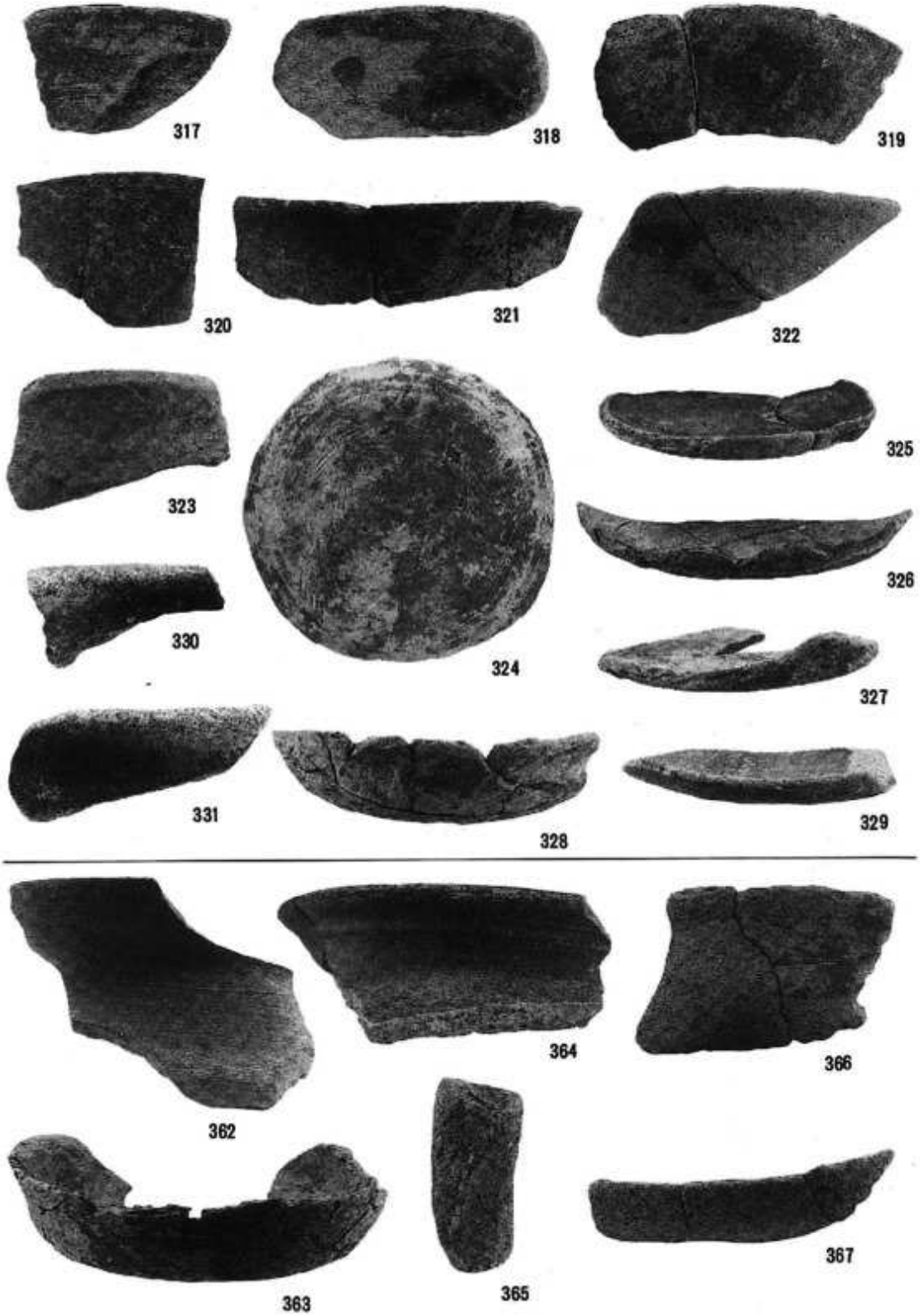
G－1区第2遺構面上および覆土内出土須恵器（260～265）
F－1～G－2区第3遺構面上および覆土内出土須恵器・土師器（267～274）
〃　　表土および堆積土層内出土古銭・須恵器（276～280）



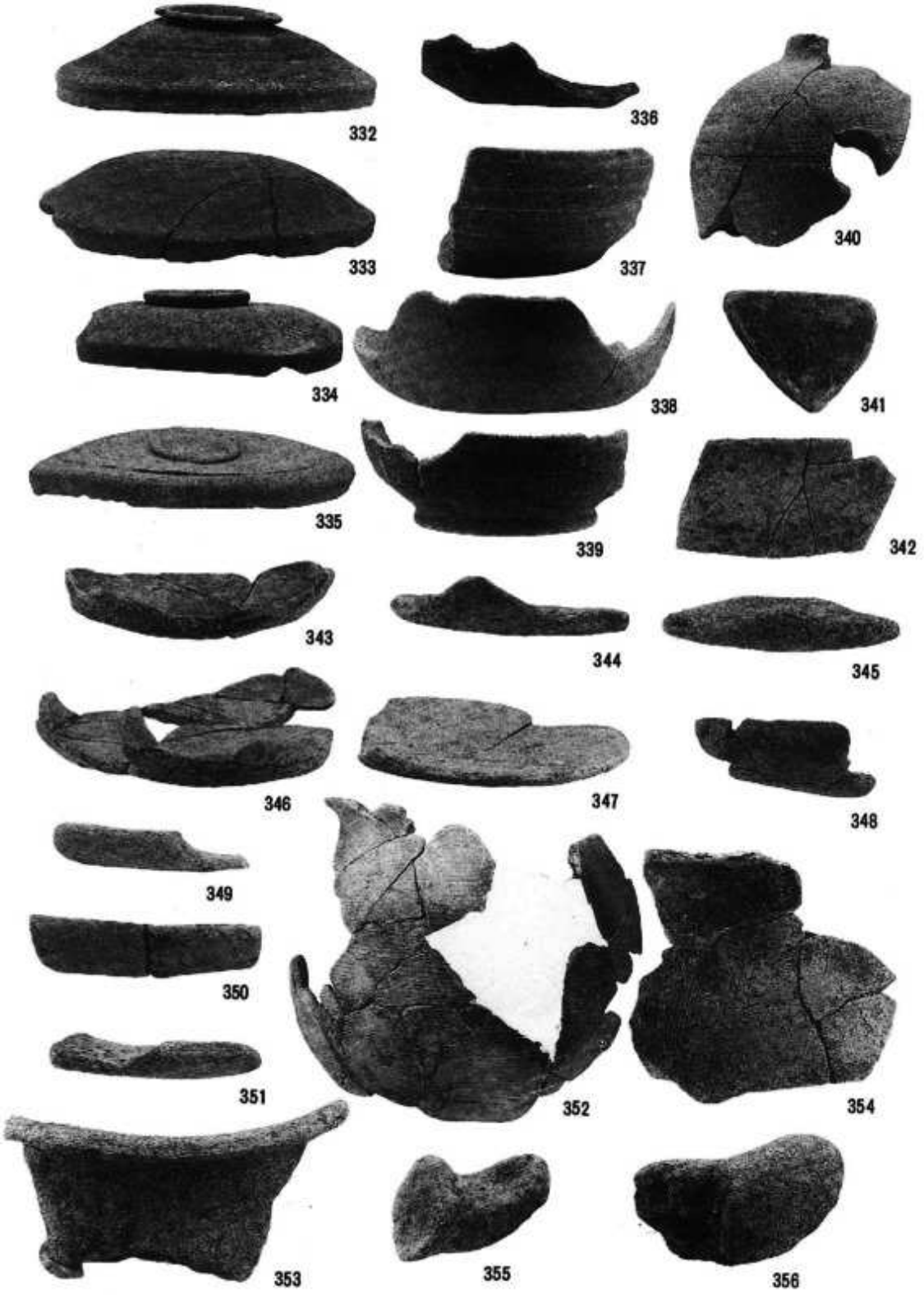
H－1～I－2区堆積土層内出土須恵器（上段）
C－3区表土および堆積土層内出土須恵質品（中段286・287）
〃　土器溜り1出土須恵器・土師器（下段）



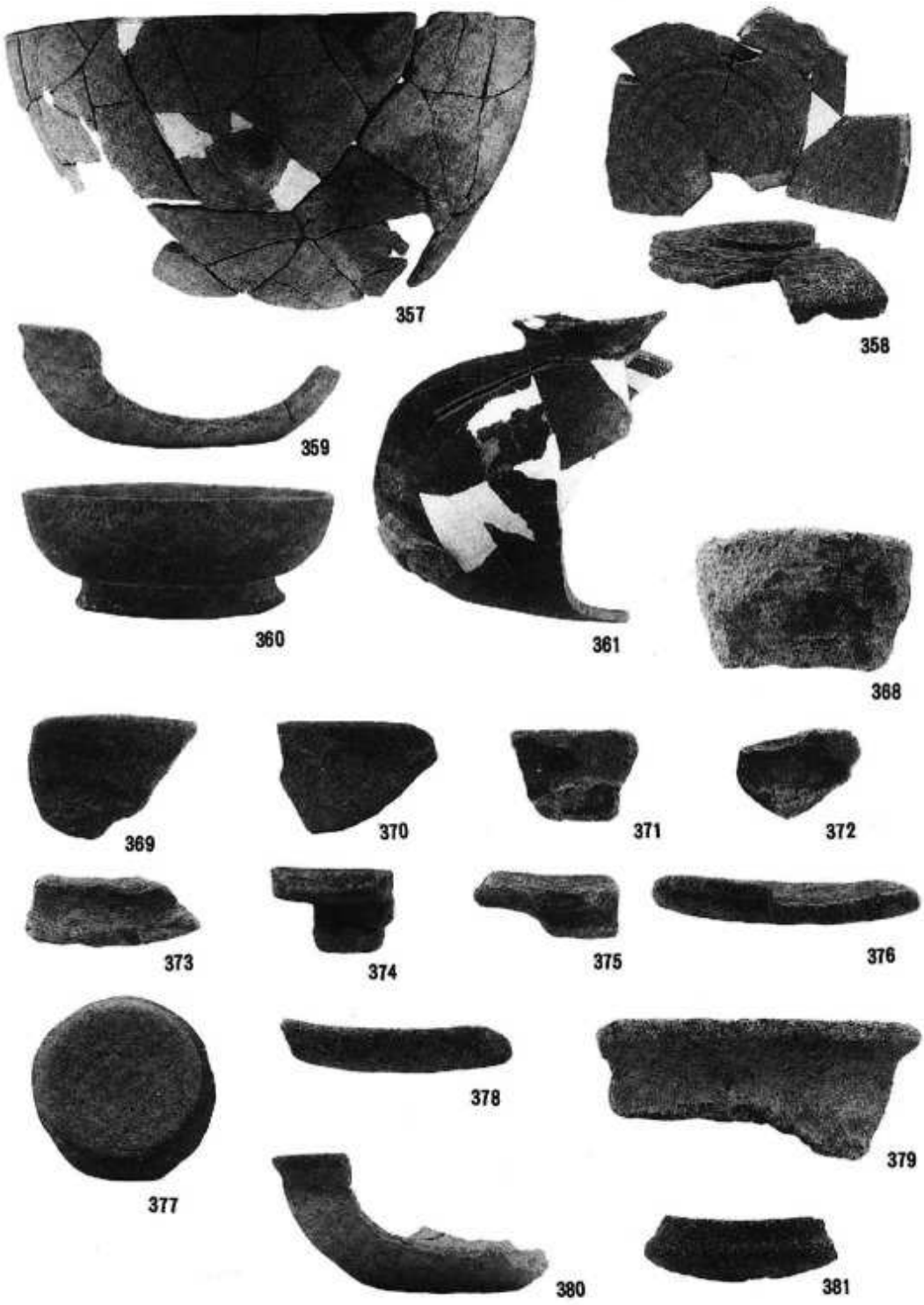
C－3区SB－01P1内出土須恵器・土師器（304～313）
〃　　P6内出土土製支脚（314・315）
〃　　P7内出土須恵器（316）



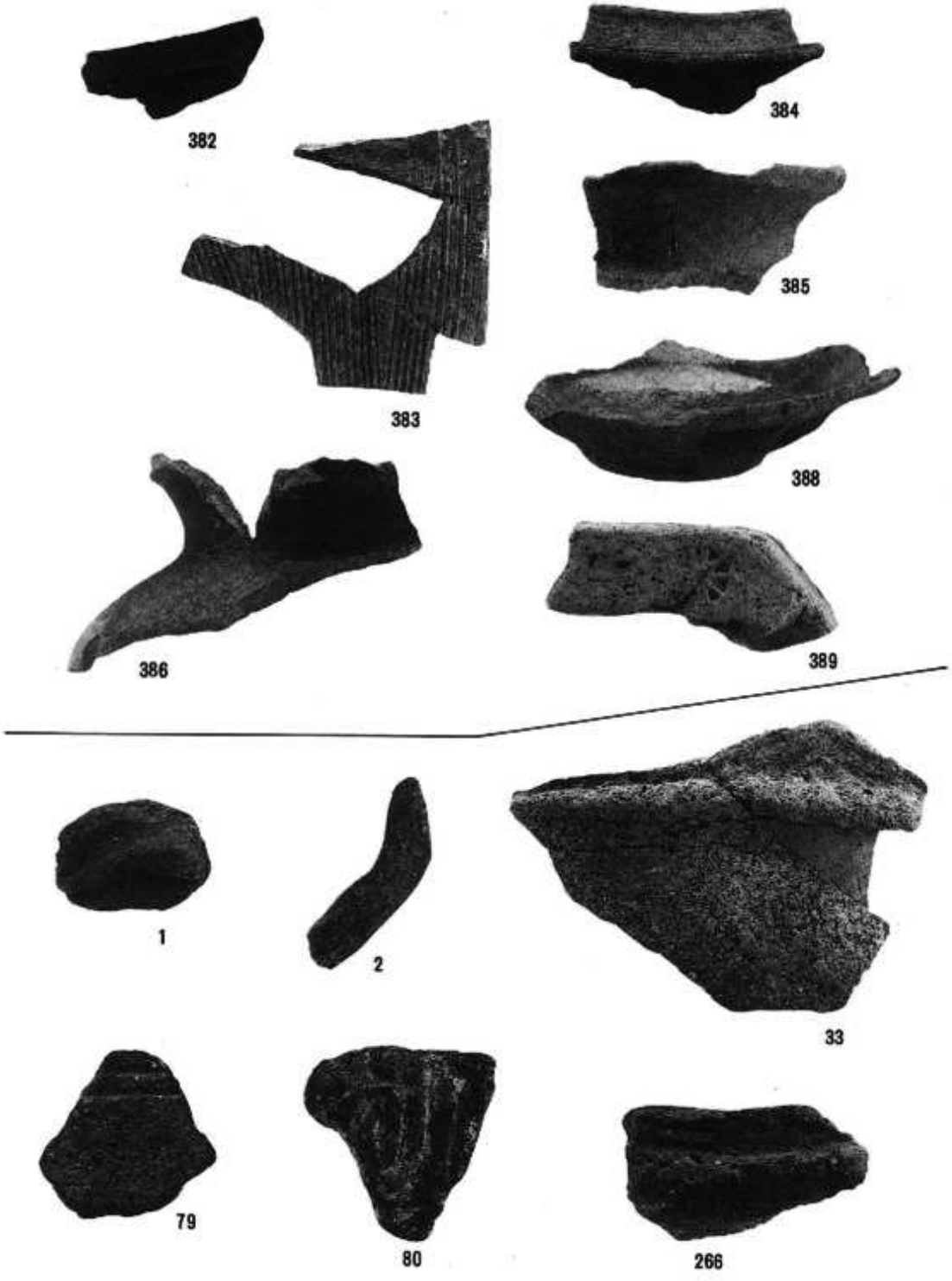
C－3区土器溜り2出土土師器（上段）
〃　SB－01床面出土須恵器・土師器（下段362・363）
〃　削平部土器包含層出土須恵器・土師器（下段364～367）



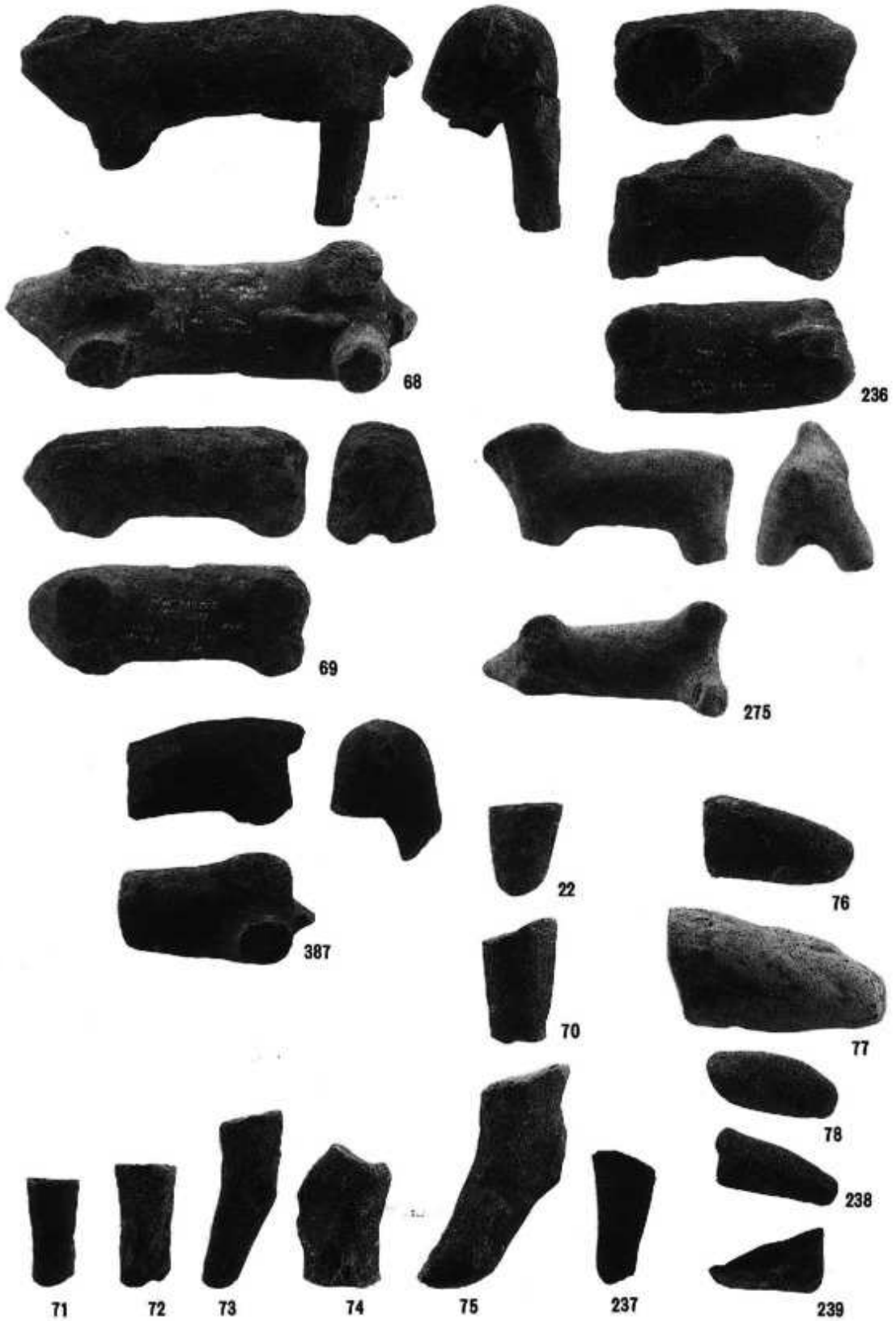
C－3区SD－02内出土須恵器・土師器



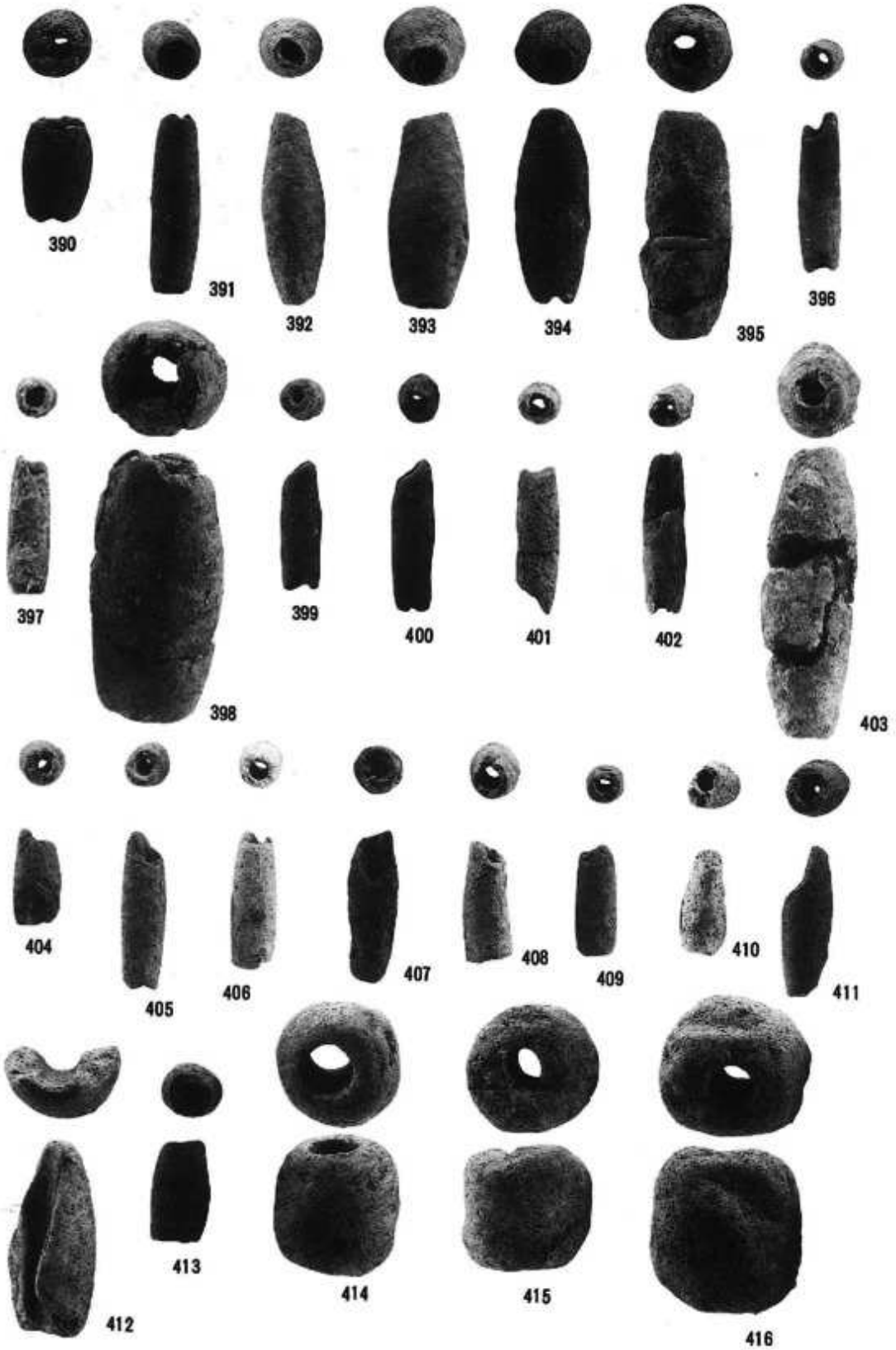
C－3区SK－16内出土鍋（357）
〃　SB－01内土器包含層出土須恵器（358～361）
D－3区SD－01内6層出土土師器（368～376）
〃　SD－01底面出土須恵器・土師器（377～379）
〃　地山面出土須恵器（380・381）



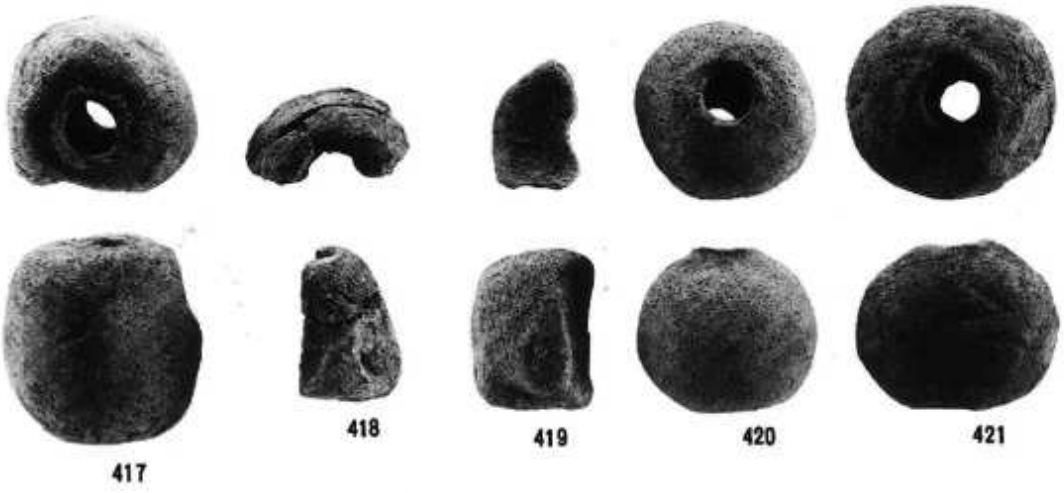
G－3区表土内出土陶器（上段382・383）
排土および出土地不明土器（上段384～389）
縄文式土器（下段）

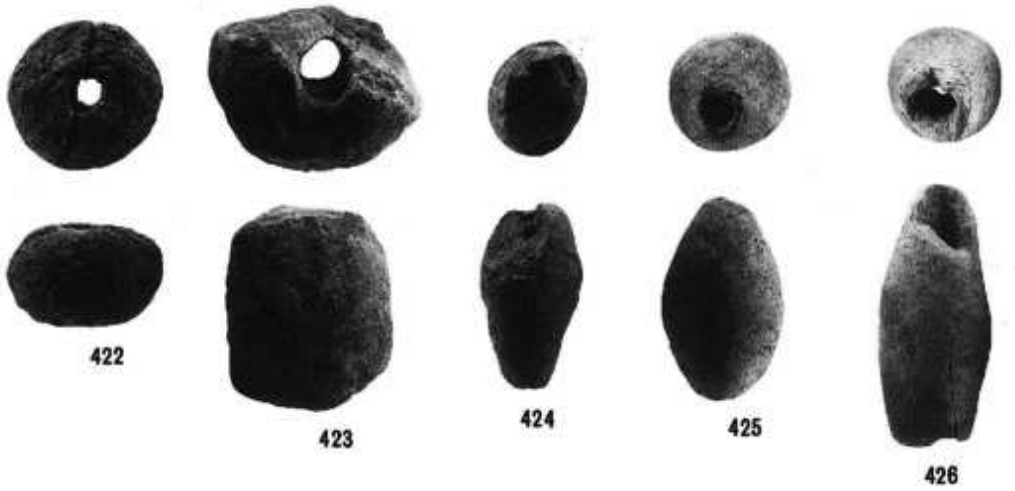


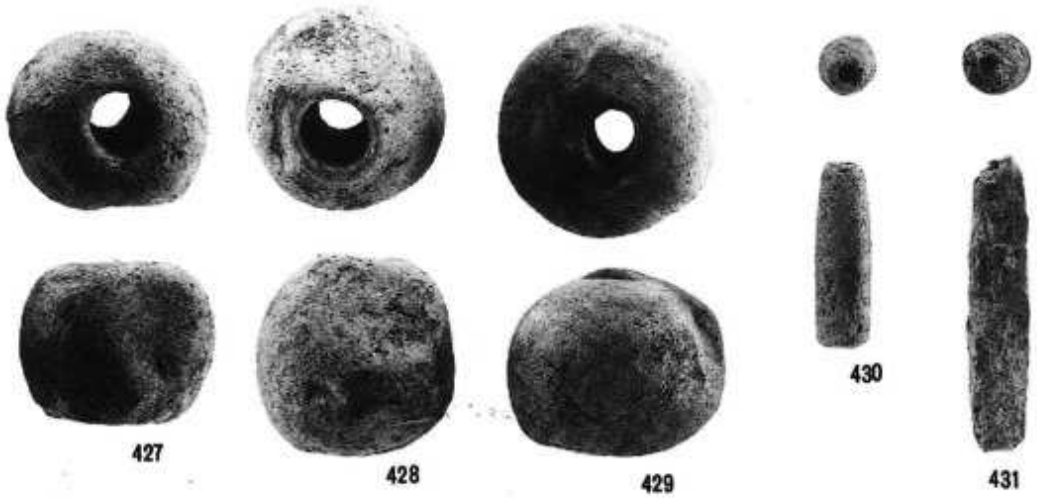
土　　馬


390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416

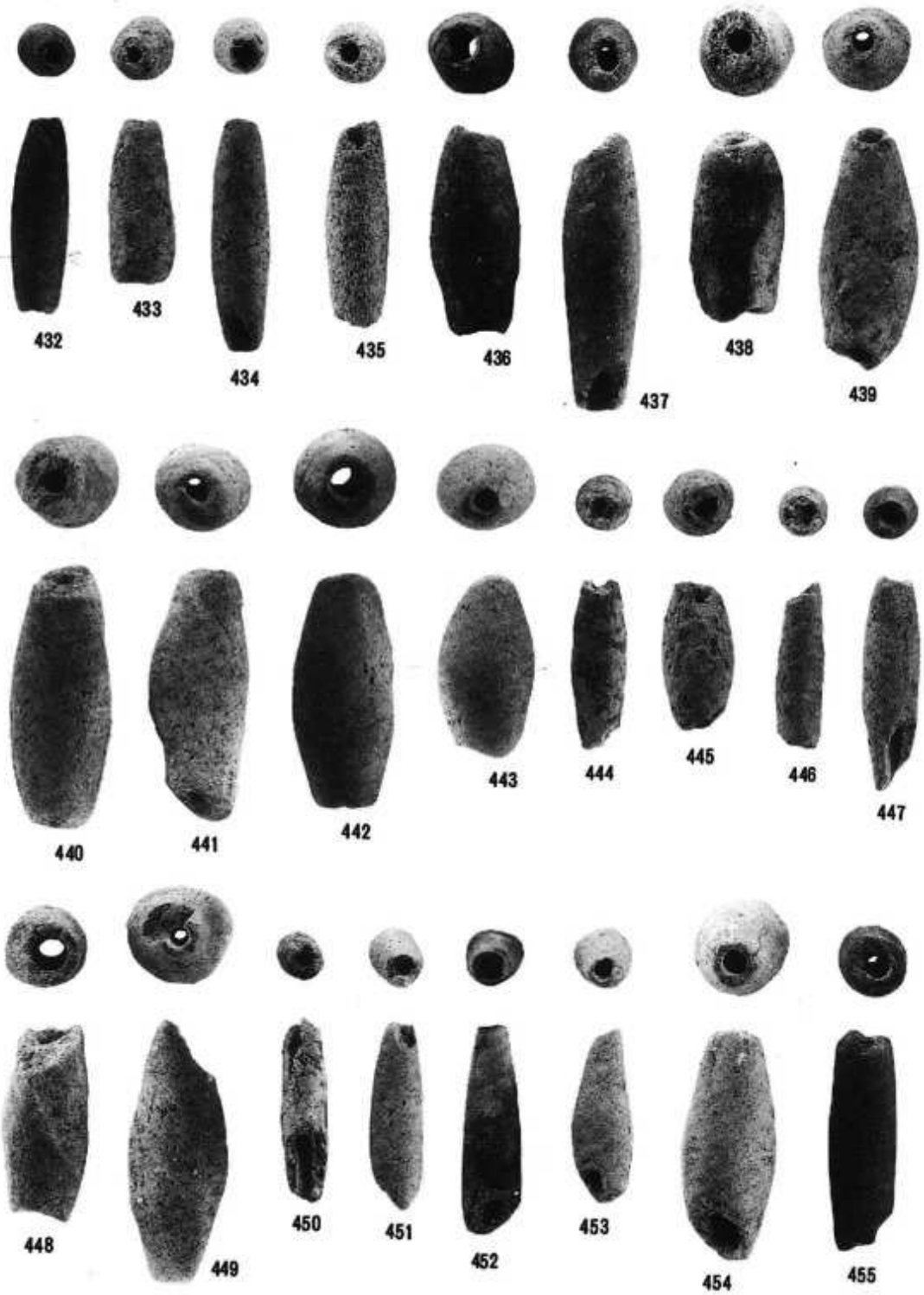
土　錘　(1)



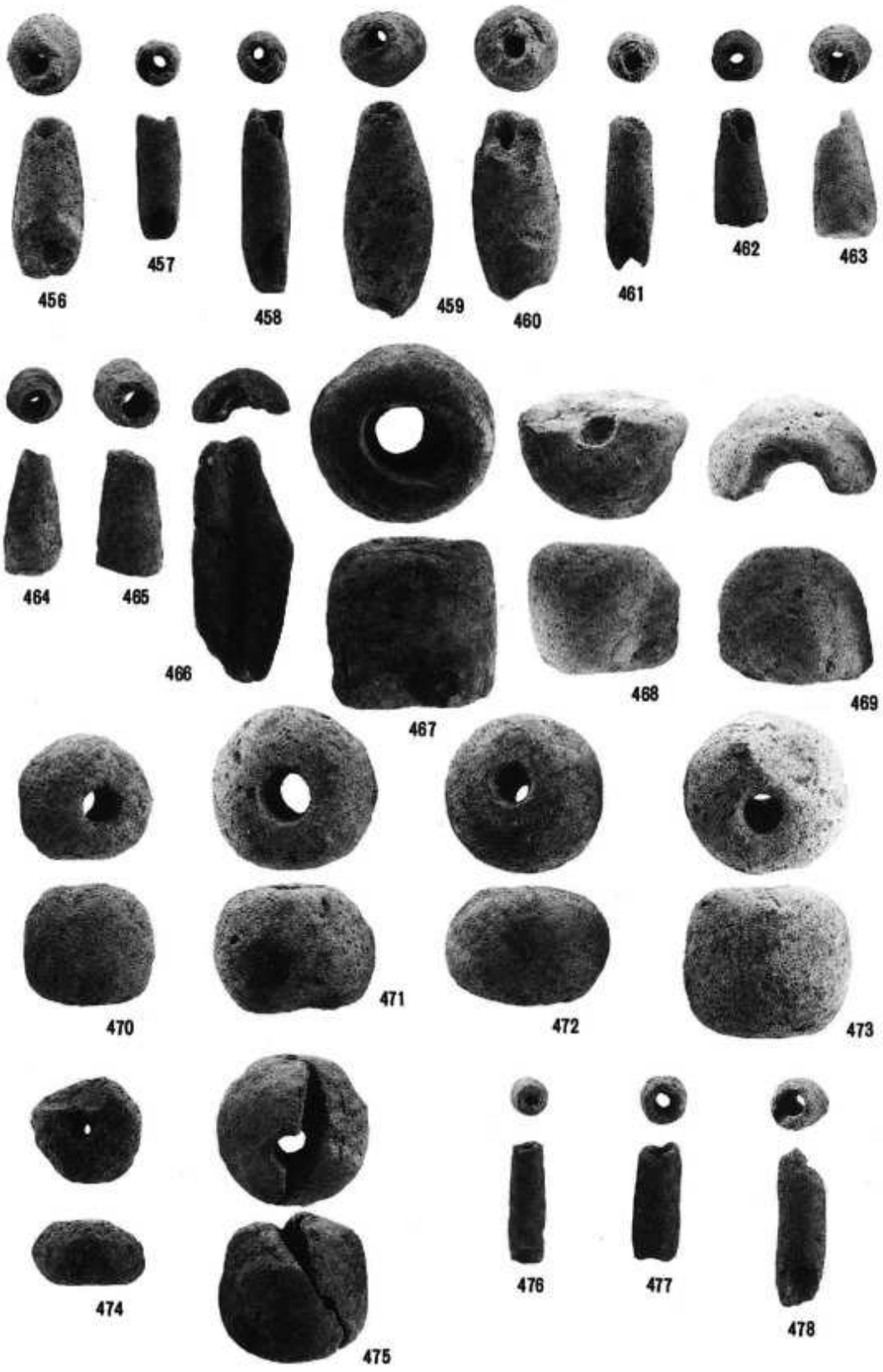




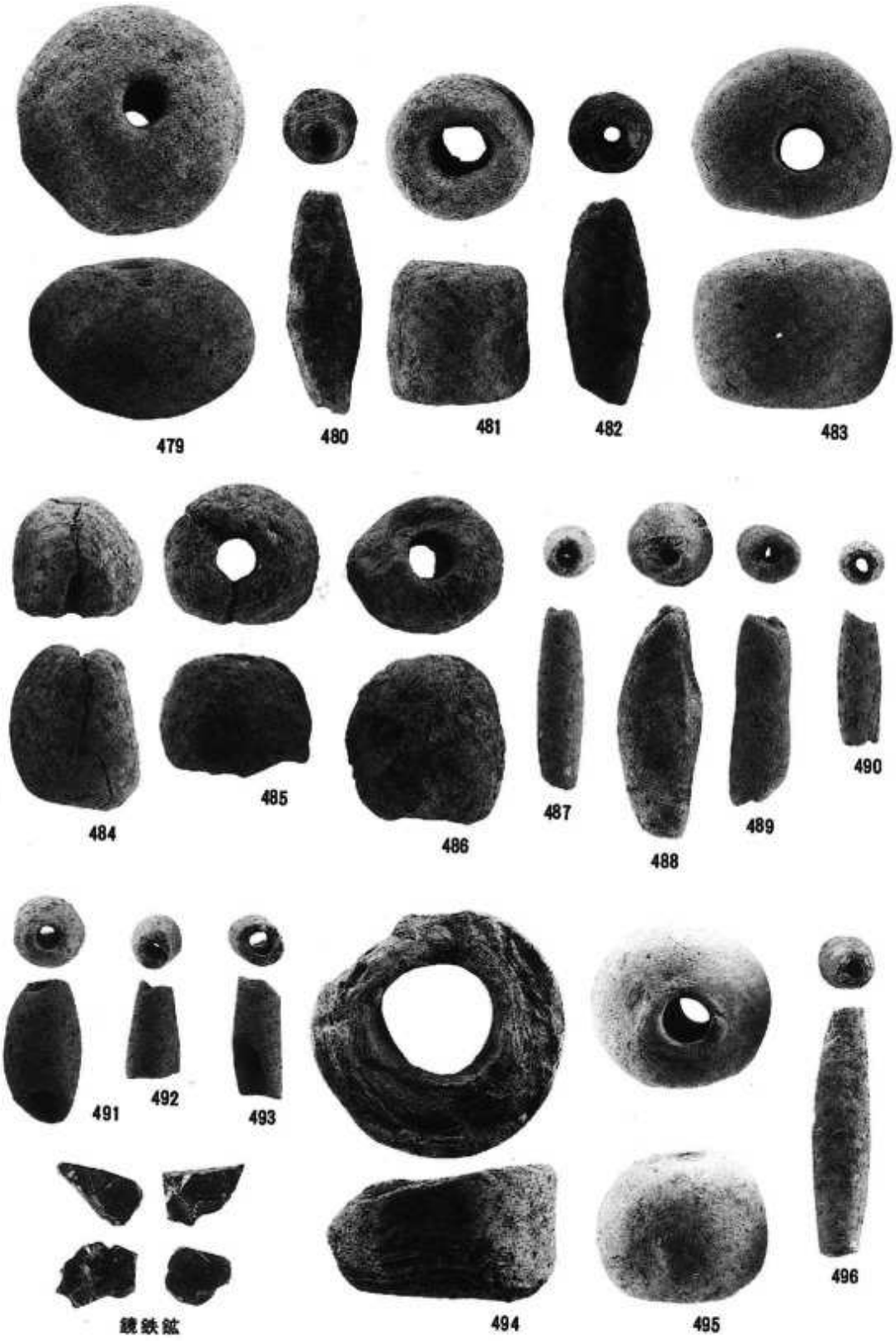
土　錘　(2)


432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455

土　錘　(3)


456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478

土　錘　(4)


479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
鏡鉄鉱

土錘(5)・鏡鉄鉱

イガラビ古墳群

イガラビ古墳群

1. 調査の概要

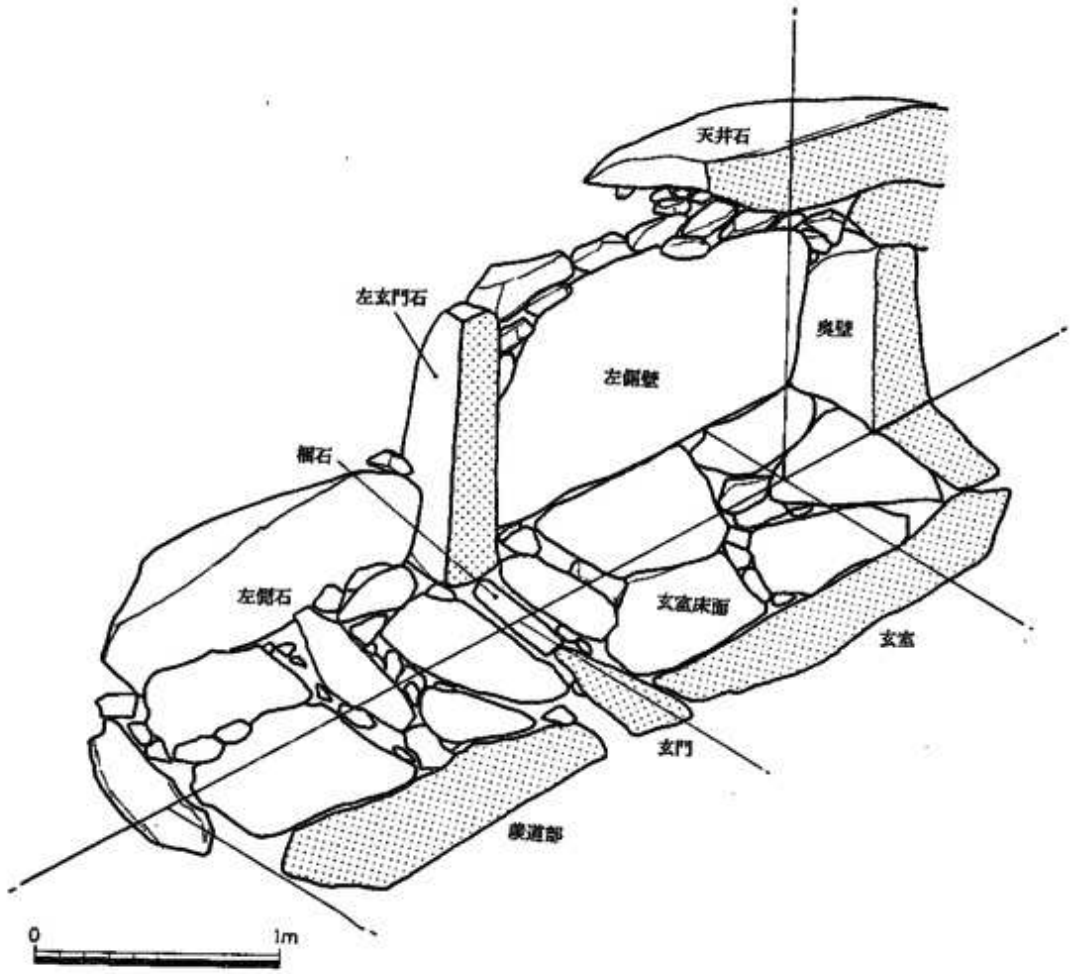
イガラビ古墳群は，松江市大井町字イガラビ1273に所在する。標高52mの丘陵頂点から南に下った，標高45mの丘陵斜面に1・2号墳が並列して構築され，更に同じ斜面を南に15m下った標高40mに3号墳がある。イガラビ4～8号墳は，イガラビ2号墳から北東に約30m離れた，標高47m～49mの緩傾斜地に隣接して所在する。

イガラビ1号墳と2号墳は丘陵斜面の平坦部に一見して古墳と思われる盛土と，それに伴う石室の開口部が認められた。しかし，イガラビ3号墳は墳丘の盛土が全く認められなかった上に，北側に後世の山道が作られて古墳を覆っていたために，表土の除去を行うまで全く気が付かなかった。

イガラビ1・2号墳については，昭和61年度に墳丘とその外部施設を中心とした調査を行って，遺構の規模を確認した。翌昭和62年度の調査では，最終的な石室の構造を解明するため，観察・実測しながら解体することが主たる作業となった。イガラビ3号墳は，昭和61年度にすべての調査を完了した。イガラビ4～8号墳については昭和62年度中に全ての調査をおこなった。以下，各古墳について調査の概要を報告する。

2. イガラビ1号墳

位置と現状　調査前の現状は，一辺約8m，高さ1.5m前後の方墳で，墳丘の中央には1.8×1.2m，厚さ0.5mの大石が露出し，南側には羨道と見られる開口部があった。また，墳丘の外周には幅1.5m，深さ30cmの落込みが巡っていた。本古墳と隣接する2号墳の所在する丘陵南斜面は，かなりの急傾斜地であることも考慮すると，本古墳は南に入口を設ける小規模の横穴式石室を有する古墳で，墳丘の築成は丘陵斜面を方形に掘削して盛り上げる，所謂山寄せの古墳であると思われた。開口した羨道部は1m近く掘り込まれていたが，他は土砂が流入し完全に埋まっていた。しかし，地元の住民の話によると，昭和初期には内部にまで入れたということであったので，これらの土砂は盗掘を受けた後に堆積したものであると考えられた。

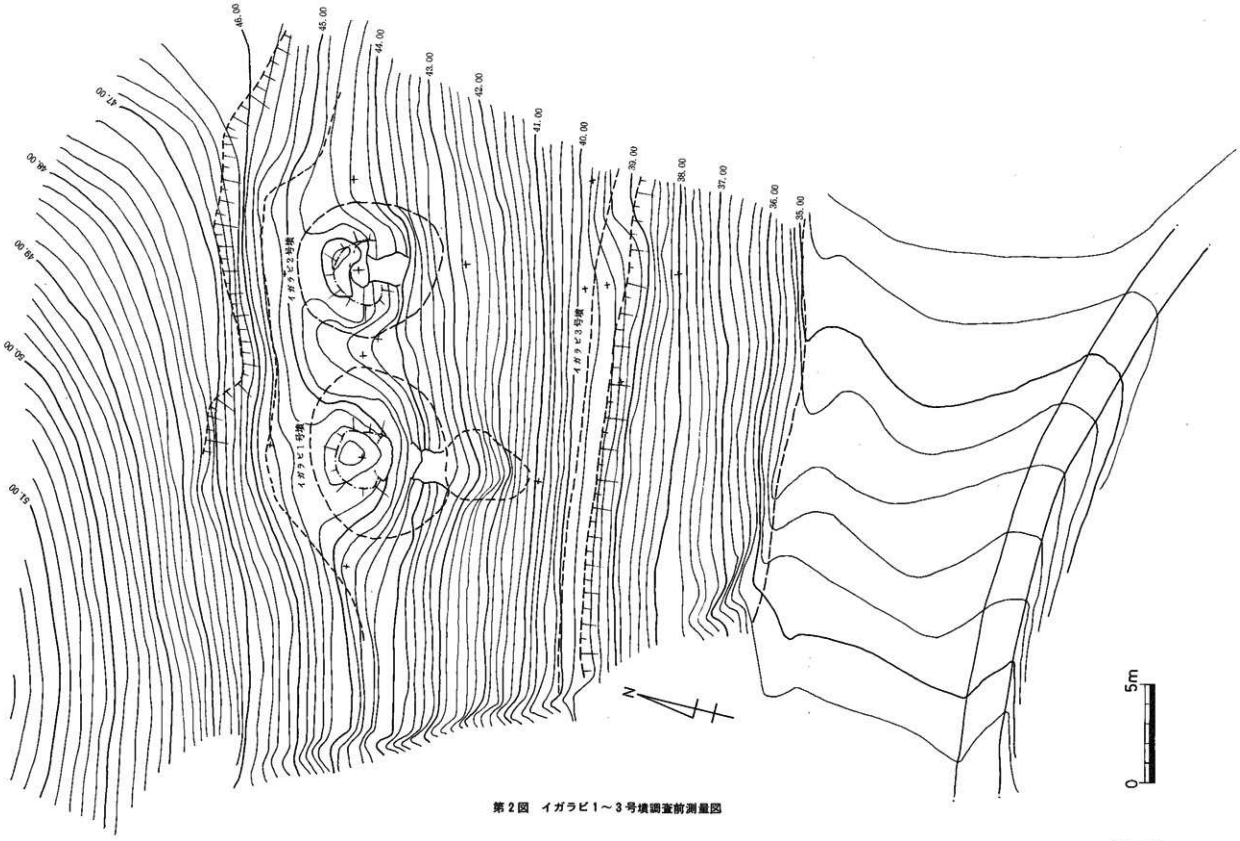


第1図　横穴式石室の各部の名称（イガラビ2号墳）

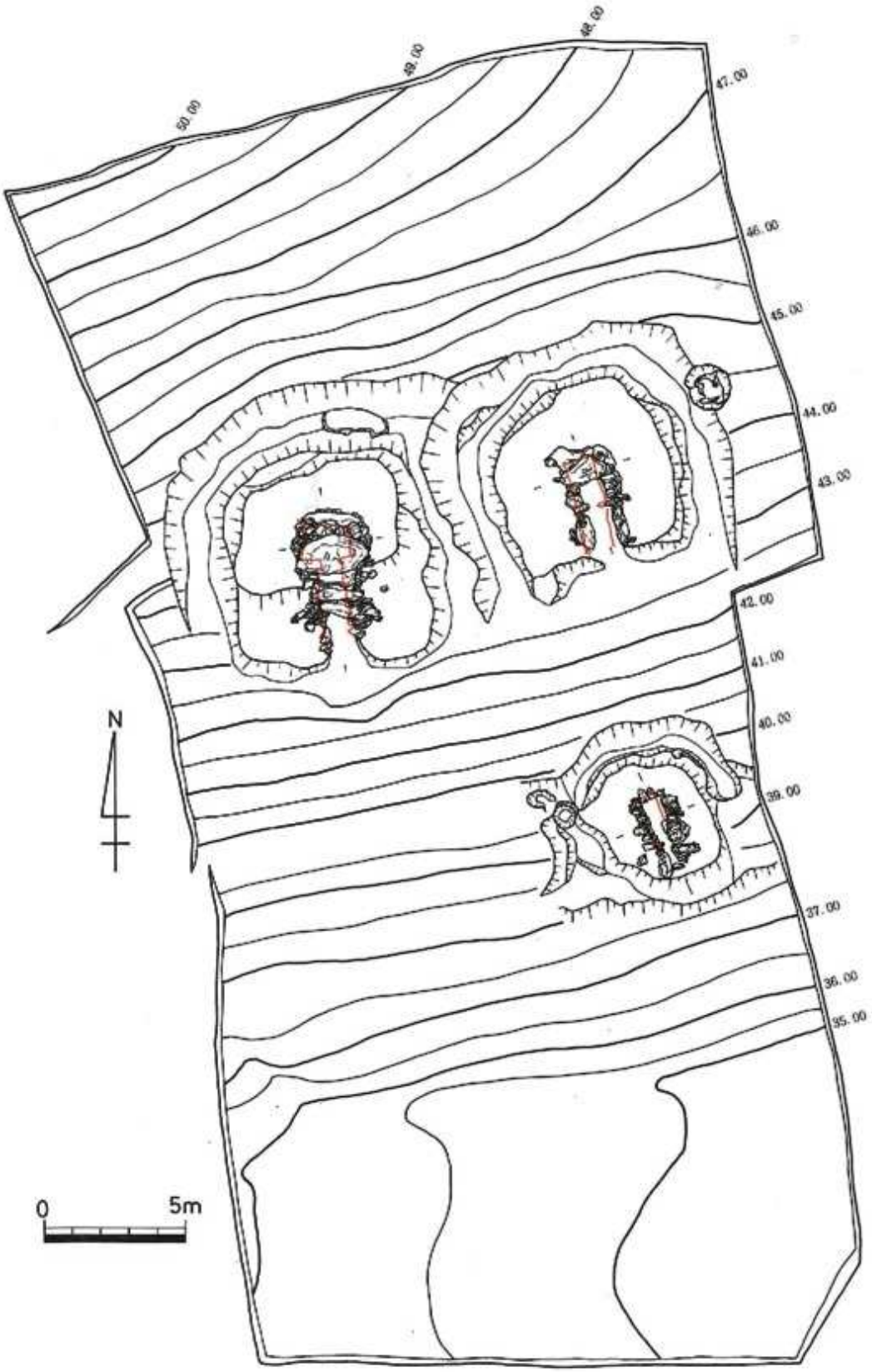
墳丘の調査は，これを4分割して土層観察用の畦を残し，それぞれの土層を確認しながら少しづつ掘り下げる方法をとった。他の古墳の調査も同様の方法をとっている。

石室の調査に際しては，天井石を除去した後，羨道・玄門・玄室で設定したそれぞれのセクション面にそって，墳丘盛土を除去しながら順次解体していった。実測後，石材を除去するにあたっては，すべての石材について通し番号を墨書した。これらの石材は，現在東工業団地内の公園の一角に保存され，今後の石室の復元にそなえている。

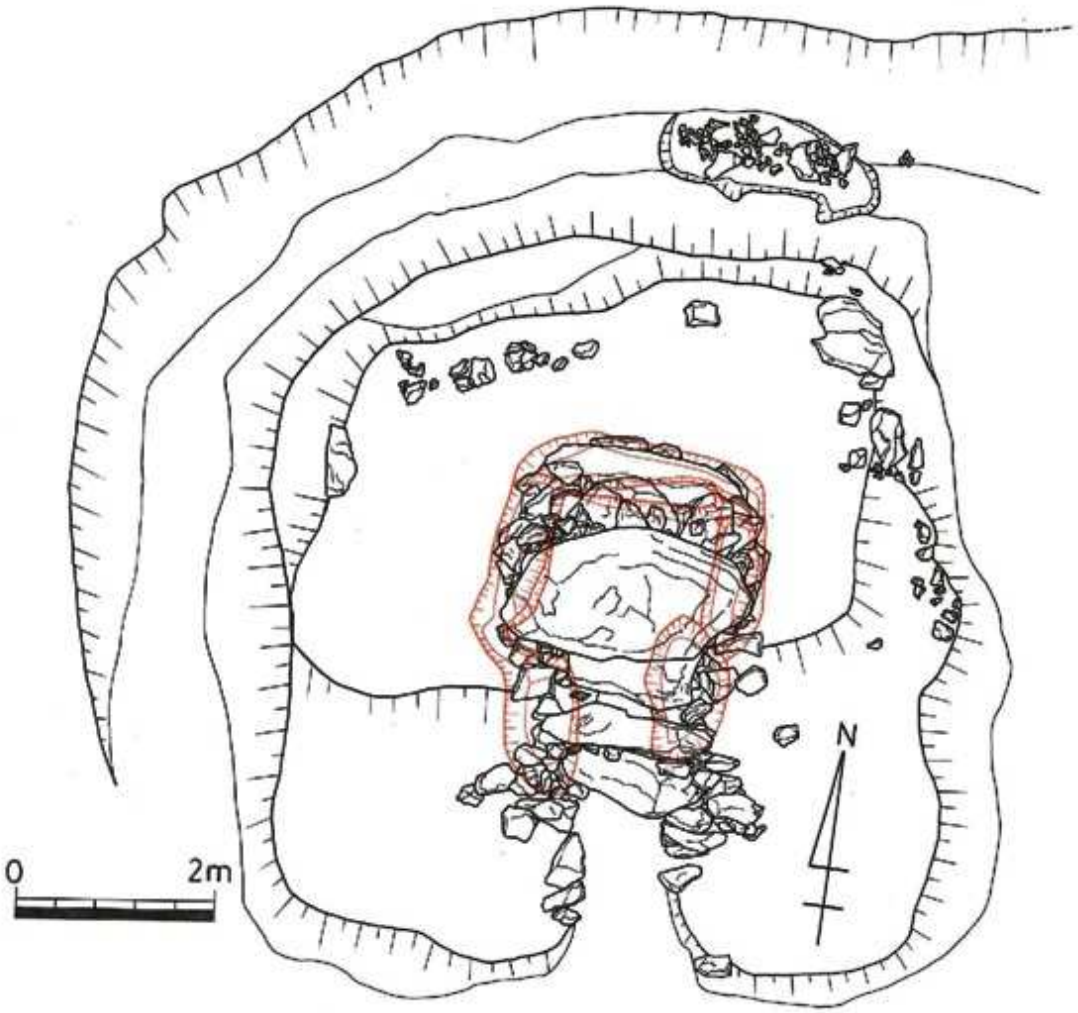
墳　丘　墳丘の規模は，東西7.5m，南北8.0m，高さは玄室床面から天井石の上面まで1.84mである。墳丘の外側には南側を除く三方に，幅2.2m，深さ0.6mの周溝が巡っていた。この周溝は，地山面まで掘り下げたところ，2号墳と接する東側では，一部が切られているように見られた。周溝の内側には外護列石が施されていた。この外護列石は，墳丘の東・



第2図　イガラビ1～3号墳調査前測量図



第3図　イガラビ1～3号墳調査成果図

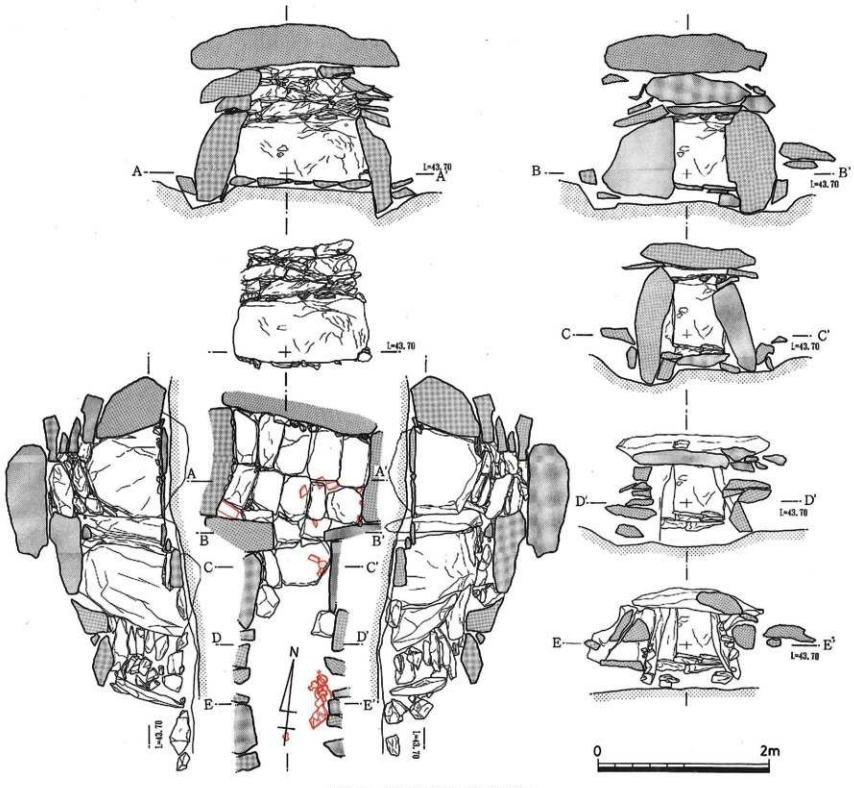


第4図　イガラビ1号墳調査成果図

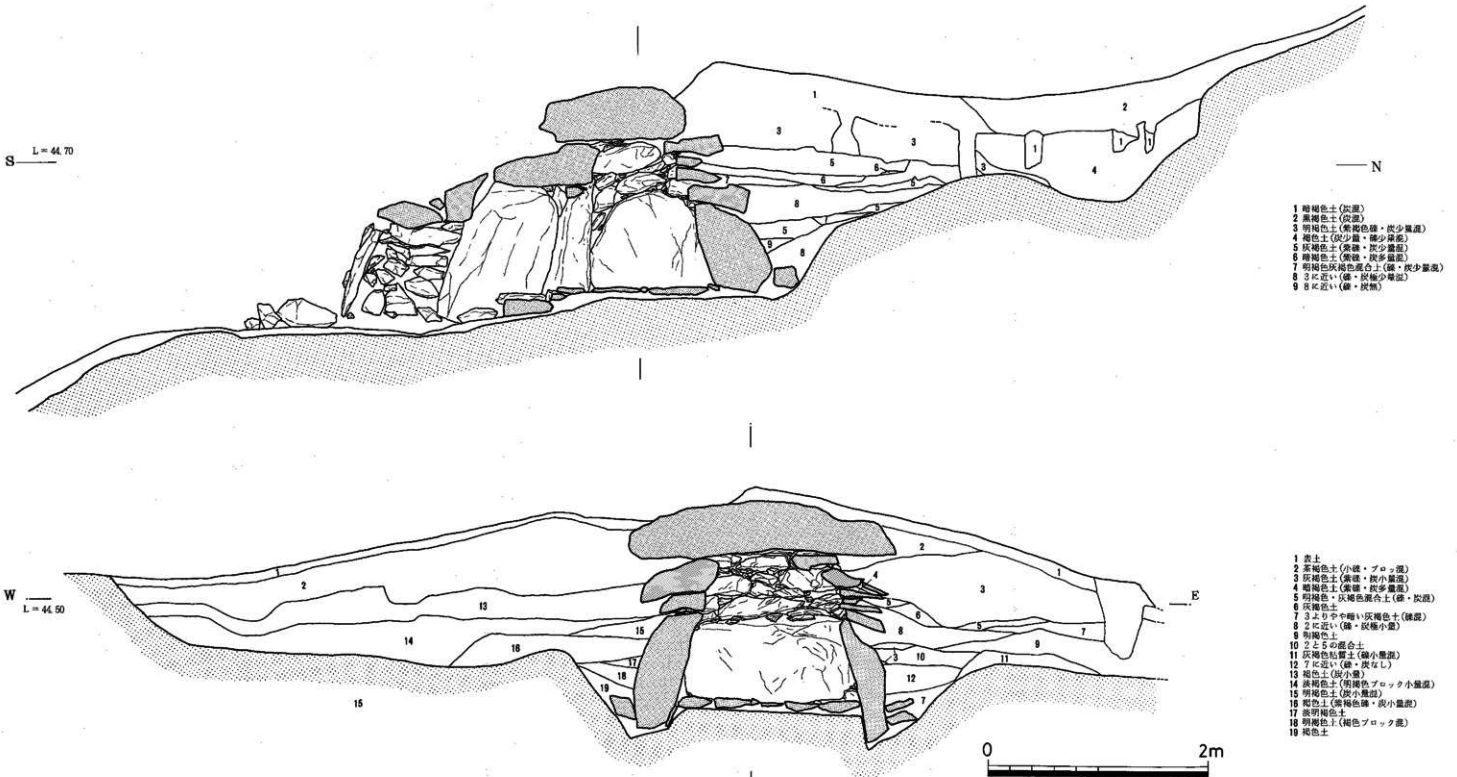
北側では顕著に認められたが，羨門側と西側ではほとんど残っていなかった。しかし，残された石材の位置からみて，当初は墳丘の外周を巡っていたものと推察される。

羨門のある南側は，幅2m前後の平坦面を作った後，急斜面に続いている。この平坦面は，2号墳の前面にも続いていくもので，前庭部を成すと同時に墓道としても使用されたものと考えている。

主体部　玄室は横幅1.7m，奥行きは東壁で1.1m，西壁で1.3m，高さ1.4mを測り東西に長いT字形を呈し，床面には11枚の略長方形の偏平な石を敷く。側壁は，全て天井に向かって内傾し，高さ0.8m程の腰石を各一枚づつ立て，天井部までの間は小口積みとしている。羨道部から玄室にかけて天井石は計4枚が遺存する。石室の中軸線はN7.5°Wであった。



第5図　イガラビ1号墳主体部実測図



第6図　イガラビ1号墳墳丘断面図

玄門部は高さ0.9m，幅0.6mを計り，左右に大石を立てている。左側の玄門石は高さ1.0m，幅0.4m，右側の玄門石は高さ0.84m，幅0.14mで，上端に10cm×15cm，長さ95cmの長方形の楣石を置く。

羨道部は幅0.8m，高さ0.8m，長さ2.5mで南に入口を設ける。玄門に近い部分は割石を横積みにし，大石を左右に一枚づつ立てる。羨道部前端には偏平な立石を左右に一枚づつ立て羨門としている。玄門及び羨門が閉塞された状況はなかったが，前庭部には石室に使用されたものと同様の石材が大量に発見されているので，これらの一部が閉塞に使用されたことは十分考えられる。

石室の解体調査の結果からこれらの配石順序を追ってみると，イガラビ1号墳の玄室は玄門石を最初に設定したようである。次にこの玄門を挟むように羨道の左右と玄室両側石を置き，玄室は厚さ60cm，長さ1.8mの奥壁を立て掛けるように置き安定させる。地山面は玄門及び羨道とも石材の大きさにあわせて，上端が水平になるように地山の深さを変えて調整している。この後，4～5段にわたって上下の偏平な長方形の石を羨道に直角に配していく小口積みの手法で玄門の高さまで積み上げていく。最後に玄門部に1枚の天井石をわたし，玄門部を除く三方を内側に傾斜させながら2～3段の小口積みで高さを調節した後，厚さ50cm，平面1.8×1.2mの大石をのせて玄室を構成する。

羨道部も同様の手法をとり，玄門付近は羨道部側石の上に1～2段の小口積みの後，2枚の天井石で覆っている。

羨道床面には貼り石はなかったが，玄門入口に偏平な石を設け玄室に続く。羨道部と玄室の床面の差は20cmほどである。石材の総数は大小あわせて約250個であった。

出土遺物　玄室内に副葬品と思われる物は全く無かったが，陶棺の破片が床石の欠落した部分に大きさを合わせたようにあたかも意図的に落ち込んでいた。羨道部には当初赤褐色を呈する粘質の単一土が流入していたが，この中にも須恵器片の他に陶棺の破片が含まれていた。羨道部東側の床面では陶棺片と共に須恵器6個体がまとまって検出された。また，前庭部と南側の墳裾にかけては，多くの須恵器片と陶棺及びの破片が発見されている。

南側の墳裾と前庭部で検出された須恵器は坏蓋・壺・甕等種々あるので，器種ごとに分けて説明する。

坏蓋　14点出土しているが，形態的特徴から大きく4つに分けて説明する。1類は口径8.0～9.9cm，器高3.1～3.9cmまでのもので，天井部が丸く，口径が比較的小さいものである。

口縁端部は内側に屈曲するもの（A－19），ほぼ垂直なもの（A－22・37・38），わずかに外反するもの（A－21・36）がある。技法的にはいずれも口縁部内外面は回転ナデ，天井部の外面は回転篦削り，内面は静止ナデにより調整するものである。Ⅱ類（A－3）は，Ⅰ類より口縁部が垂直に高く立ち上がるもので，天井部は比較的平坦である。外面は全体にわたって荒い回転篦削りで調整する。Ⅲ類は輪状系のつまみを有するものである。つまみの端部が上外方に立ち上がるもの（A－2）と外側へ垂れているもの（A－1・43）があり，つまみの内面は平坦である。A－42は端部はほぼ垂直に立ち上がり，つまみの径も比較的小さく内側の平坦面も無いものである。内外面とも篦削りで調整する。Ⅳ類は擬宝珠系のつまみを有するもので，A－26・44がある。いずれもつまみは欠損しており形状は不明であるが，口径は10cm前後の小型で，返りのつくものである。A－40は返りのない口縁部のみの破片である。

坏身　受部のある丸底のものだけが7点（A－13・15・17・20・23・34・35）出土した。口径は7.2～9.4cmまで，器高は2.7～3.9cmまでのものである。立ち上がりは大きく内傾し，受部との高さの違いはほとんど無い。いずれも底部外面は篦削り，他は回転ナデにより調整する。

高台付坏　4点（A－4・8・9・39）ある。高台部は「ハ」の字に開くが，端部が角張っているもの（A－8）と丸いものがある。口径13.4～17.6cmと幅がある。高台部は貼付けている。

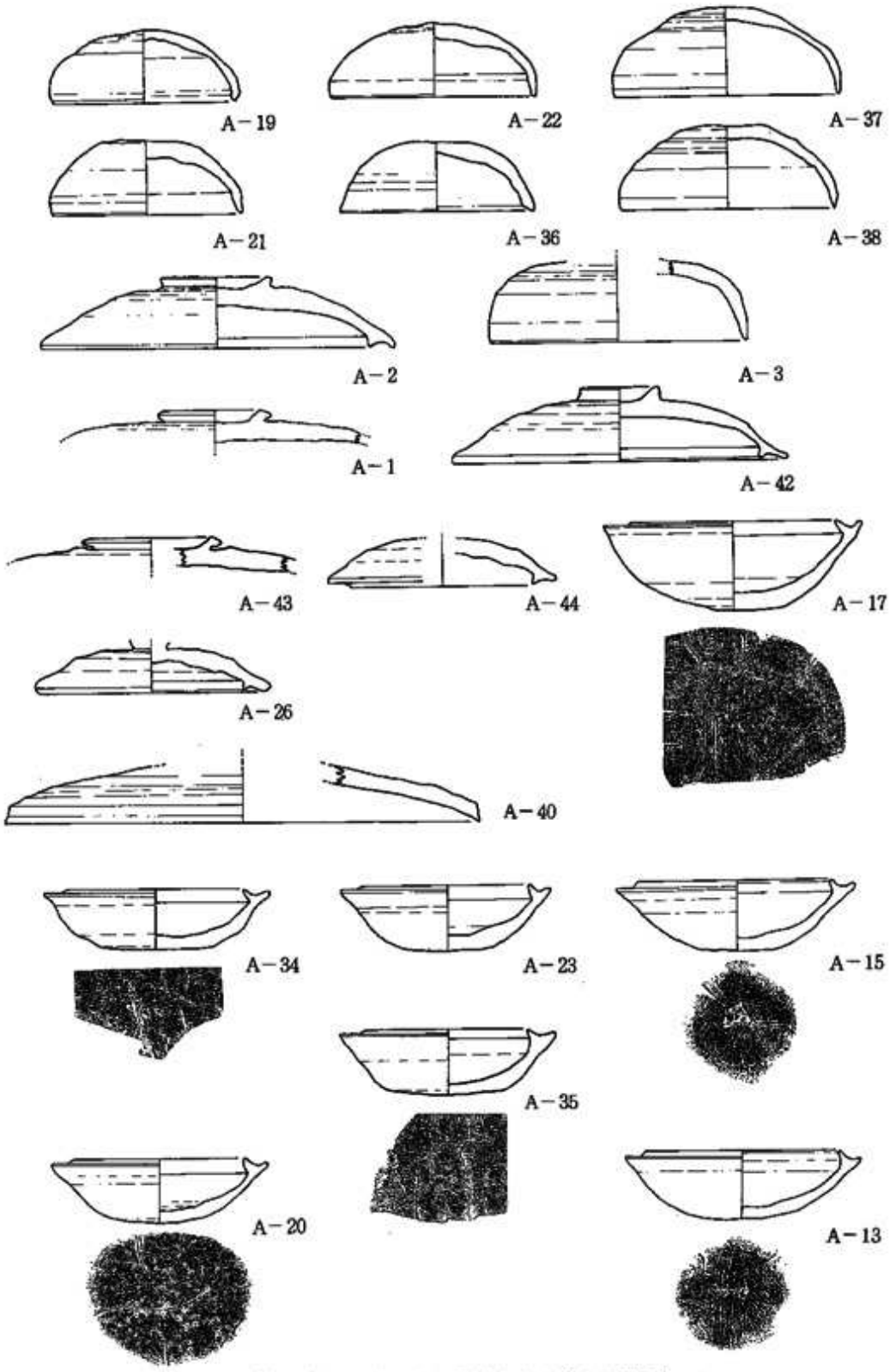
平底坏　西側の表土中より平底の坏片（A－10）が採集された。底部外面に回転糸切り痕を有しているものである。

高坏・低脚坏　高坏は完形のもの1点（A－16），脚部片のみのもの（A－45）1点がある。A－16は器高9.3cm，脚径5.6cm，A－45は脚径7.2cmを計り小型のものである。A－45には三方に透かしがある。A－24は低脚坏の脚部と思われる。いずれも前庭部で出土したものである。

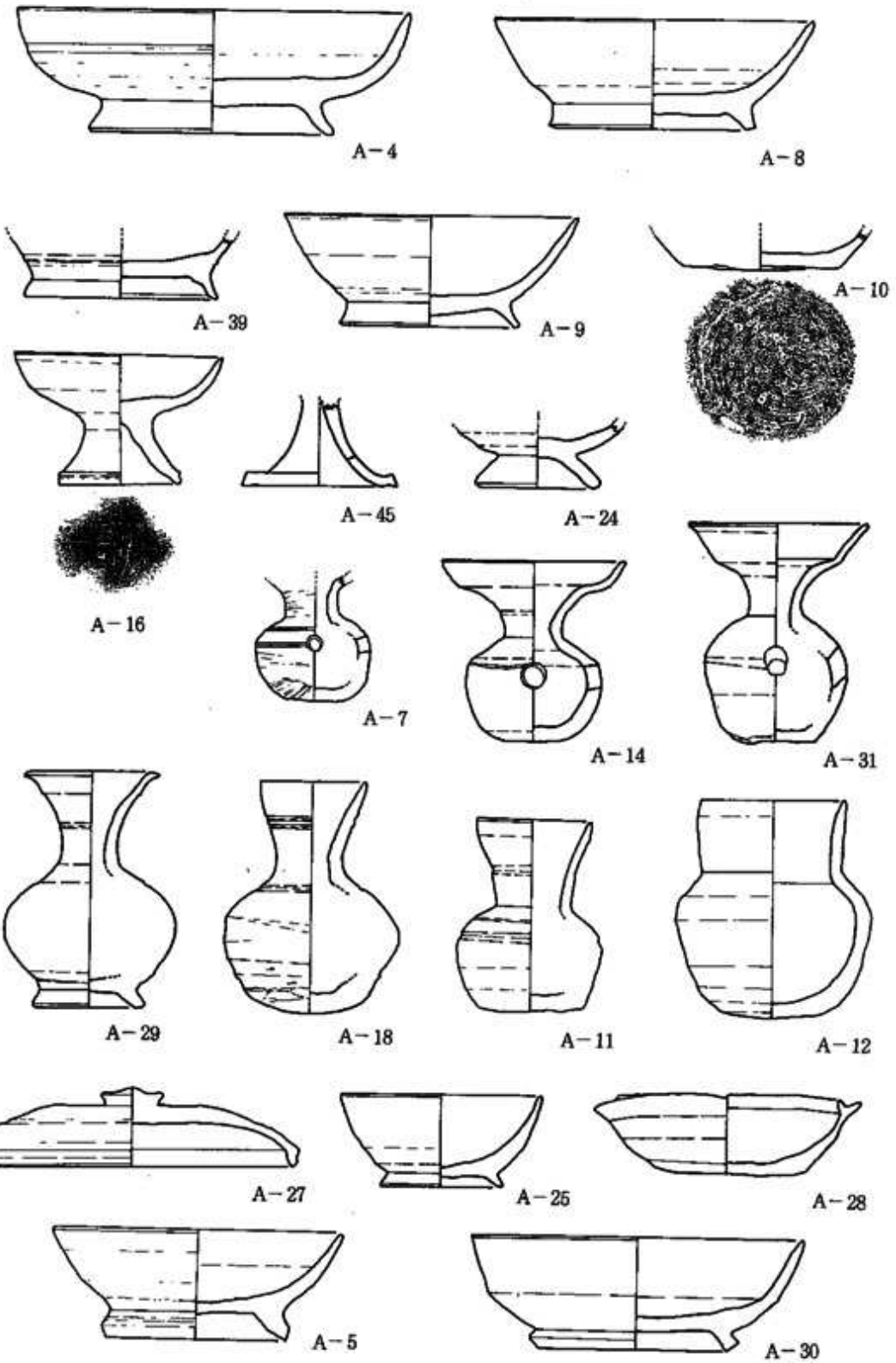
壺　3点出土している。A－31は口径8.0cm，器高10.0cm，胴部最大径6.5cm，A－14は口径8.5cm，器高8.2cm，胴部最大径6.2cm，A－7は胴部最大径5.2cmで，いずれも小型である。

壺類　壺類は3点出土している。A－11・18は小型の長頸壺（器高はそれぞれ8.7cmと10.5cm）と，同じく小型の直口壺（A－12，器高6.55cm）である。

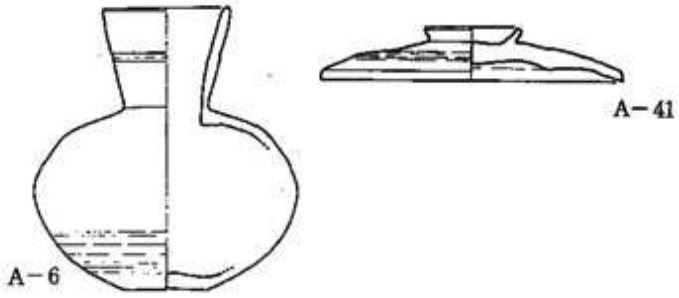
甕　羨道部から南斜面にかけて散乱していた甕片を復元したところ，口径17.0cmの甕の口縁となった（A－46）。口縁部に一条の沈線を巡らし，肩部には自然釉が付着している。



第７図　イガラビ１号墳出土遺物実測図(1)　⅓



第8図　イガラビ1号墳出土遺物実測図(2)　⅓



第９図　イガラビ１号墳出土遺物実測図(3) ⅓

羨道部東側の羨門近くでは，径約30cmの小型の落込みの中に，６個体の完形の須恵器（A－５・25・27・28・29・30）が重なりあって検出された。また，羨道部と前庭部の境では２個体（A－６・41）が発見された。

坏蓋　A－27と41の２点が出土。A－27は偏平な擬宝珠のつまみを持ち返りがない。A－41は輪状つまみを有する蓋で，口径11.8cmを計る。つまみは高くしっかりとしている。

坏身　１点（A－28）だけ出土した。これは前述した坏身Ⅰ類に相当するものである。口径9.2～9.8cmで焼き歪がある。立ち上がりは短く大きく内傾し，受部とほとんど水平である。

高台付坏　３点（A－５・25・30）ある。A－５は口径12.9cm，器高4.95cm，A－30は口径15.0cm，器高5.0cmで，高台部は「ハ」の字状に開き，端部はいずれも角張っている。A－25は口径9.0cm，器高4.2cmの小型のものである。

壺類　A－29は器高10.7cmの台付長頸壺である。A－６は器高11.0cm，口径4.8cmの直口壺である。いずれも実用としては小型すぎるように思われる。

陶棺　全部で11片出土している。

①　厚みは2.5cm。接合面付近はやや分厚くなり平坦だか，両端は丸みを帯び2.7cmを測る。外面は全体に叩きしめた後，板ナデ（カキ目？）調整を施し，４条～９条の櫛状工具による波状文をつける。文様は接合面に対して平行，直角，斜め方向の３種がある。又，接合面から14cm離れて直径1.5cmの円孔をあける。内面は同心円の押当具の痕跡を残す。内外面ともに黄色を呈し，玄室床面出土の破片と羨道部出土の破片が接合する。

②　破片の一端に接合面をつくる。外面は接合面に直角又は斜方向の平行叩きで締めた後，７条～10条の櫛目状工具による格子目につける。接合面は平坦で内外面共に1.5～２cmの幅で篦削り調整を施す。内面は同心

第10図　イガラビ１号墳出土遺物実測図(4) ⅙

円押当具痕を残す。断面の形状はやや外方にふくらみながら接合面から17cm上方で急激に内傾していく。

③ 一方の端に接合面をもつ破片。厚みは約3cm。端部から幅1.9cmの櫛描波状文による格子文様を付ける。端部から12cm離れて交差する。端部から8.5cm離れて直径1.5cmの円孔をあける。

④ 破片の一端が接合面をなすもので，厚みは2.5～2.8cmを計る。外面は全体に平行叩きで締めた後，篦による幅5mmの浅い沈線や9条単位の櫛描波状文を格子目状につける。接合面は平坦で，篦削り調整を施す。接合面から約11cm離れて直径1.3～1.9cmの円孔を焼成前にあける。胎土には砂粒を殆ど含まない締まった粘土で，外面は灰色～暗灰色を呈し硬い。内面は同心円押当具痕を残し淡黄色でもろい。羨道部東側流入土中と南部斜面の破片が接合する。

⑤ 一方の端に身との接合面をもつ。端部から20cmまではやや外方へ張り出し，それより上は急激に内傾する。これらの形状から蓋の下部と考えられる。厚みは約3cmを計り，外面を平行叩き，内面を同心円押当具で叩き締めた後，外面には格子目の突帯を付ける。突帯は幅1.8～2.0cm，高さ6～8mmの断面三角状を呈し，端部から分岐し10～11cm上方で一度交差し，さらに10～11cm上方でもう一度交差し，その先はまた分岐するものの，3～4cm上方で自然消滅する。又，端部から10cm上方に推定直径1.8cmの円孔がある。

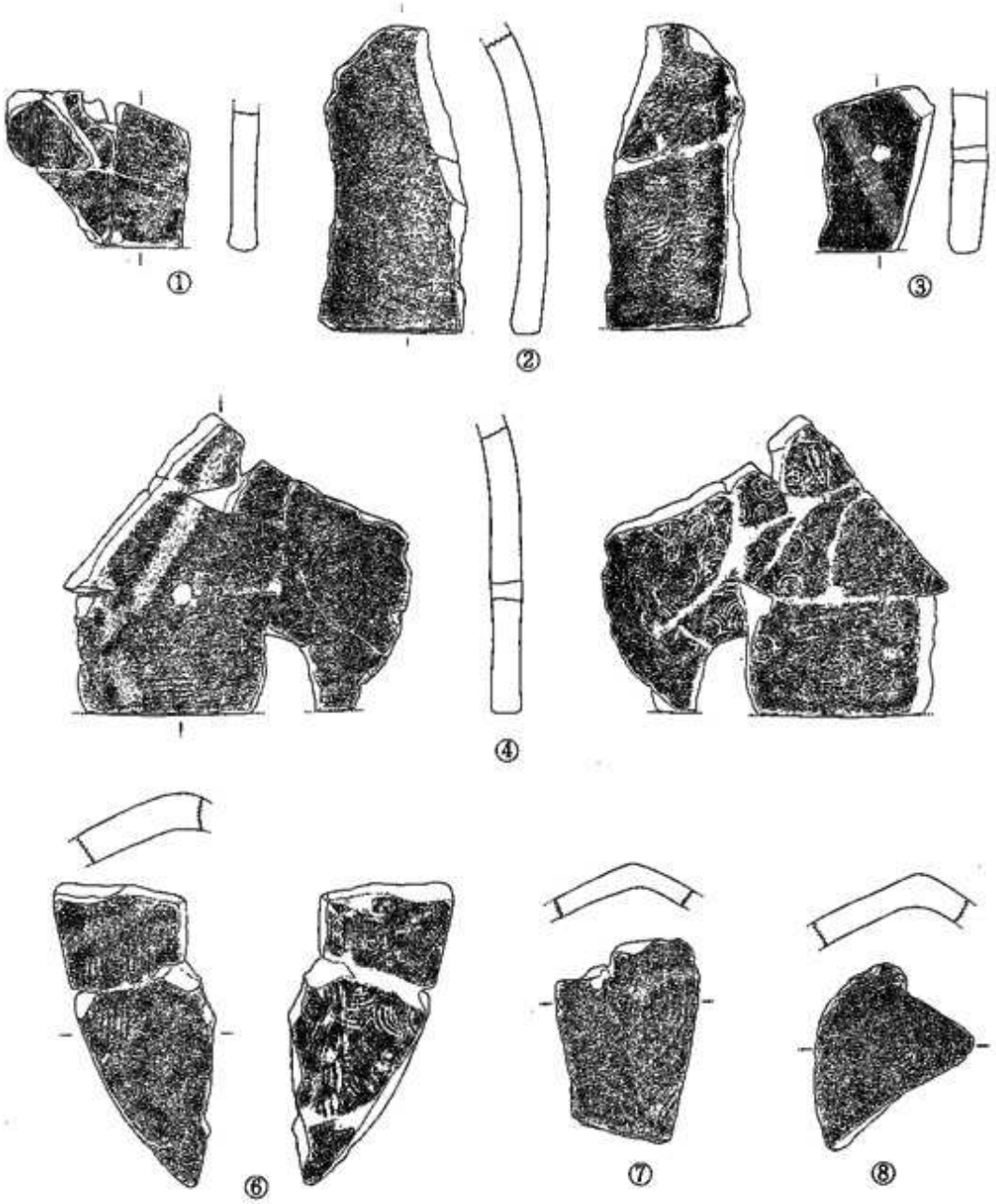
⑥ 蓋の天井部の破片で棟をもつ。厚みは約2.95cmを計り，外面は棟と同一方向に平行叩き，内面は同心円の押当具によって叩き締める。外面には棟付近まで櫛描波状文による格子文を施す。

⑦ 蓋の天井部の破片で棟を有する。厚み1.8～2.4cmを計る。内面は同心円の押当具，外面は平行叩きにより叩き締めた後，外面は板ナデ調整を施す。棟付近まで櫛描波状文の格子文を付ける。

⑧ 蓋の天井部の破片で棟部をもつ。大棟が下り棟になるかは分からない。厚みは2.5cmを計る。内面には同心円の押当具痕跡が認められず削り放し調整のようである。外面は平行の叩きにより叩き締めた後，布ナデ又は板ナデ調整を施す。棟部は0.5～1.5cmの幅でやや平坦となる。一部に篦記号が認められる。

⑨ ⑤と同種の破片である。

⑩ 蓋の天井部の破片で，側部側の厚みは1.75cm，天井部は中央部に向けて厚みを増し最大2.8cmを計る。中央部はほとんど平坦で側部に向かって緩やかに傾斜していく。内面は同心円押当具，外面は平行叩きにより叩き締めた後，外面のみは一部板ナデ調整を施す。



第11図　陶棺片実測図(1)　1/7

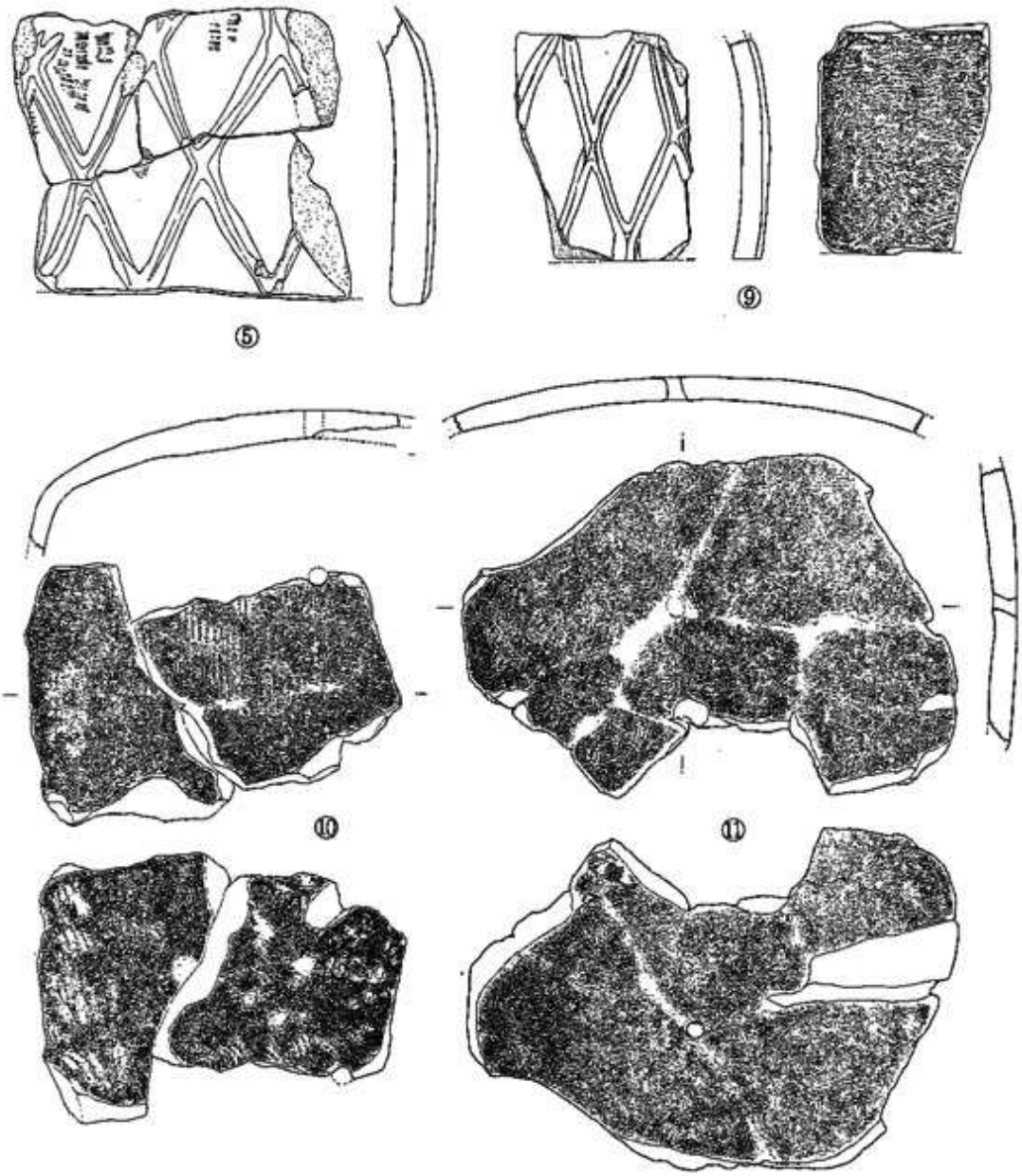
天井部中心に直径1.7cmの円孔を穿つ。蓋の上部の推定幅はおよそ54cmとなろう。

⑪　天井部の破片である。中央に直径1.3～1.4cmの円孔を穿つ。中央部の厚み2.15cm，南側で1.8～2.0cmを計る。中央部から両側部に向けて緩やかに傾斜していく。内面は全面に同心円押当具，外面は斜方向に平行叩きで叩き締めている。外面も一部同心円の押当具痕跡が認められる。破片は44×25cmのもの。

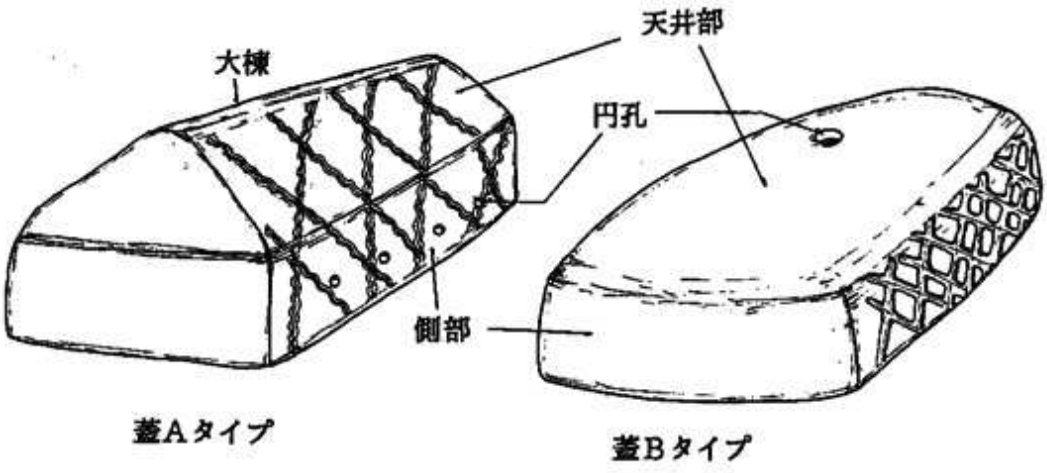
これら陶棺の破片はすべて蓋の一部と思われる。又，その断面の形状や格子文の装飾のあり方や円孔の位置などから２種に分かれることが十分考えられる。

蓋Ａタイプとしたものは，法量は分からないが天井部は切妻又は入母屋形式となり，側板がつくものである。側部の高さは20cm以上あるものと思われる。側部部は櫛描波状文による格子文を付け，それは棟部まで到達している。

側部には接合部から10cmほど上方に円孔が一定の間隔で配置されている（①②③④⑥



第12図　陶棺片実測図(2)　1/7



第13図　陶棺模式図

⑦⑧)。

蓋Bタイプとしたものは天井部が殆ど平坦であり中央部に円孔を穿つ。文様，装飾は全く無い。側部は粘土貼付による格子文がはられているが，天井部との境い目で終わっている（⑤⑨⑩⑪)。

陶棺は島根県下においては，かって安来市の横穴墓から土師質亀甲型の身から脚部にかけての破片が出土した他は知られておらず須恵質の陶棺としては今回が初例である。

本例はすべて蓋部の破片と思われ天井部が非常に平坦で大棟を思わせる稜線がない。別の稜線の破片は２個ある。いずれも「へ」の字に屈折しており，⑥の破片は一方の側に波状文の端が稜線近くまでとどいているが他方の面は無文である。これは側部の角か側部と天井部の屈折線付近と思われる。もう一方の破片は稜線が微妙にカーブしており蓋部は全体としてかまぼこの上部を低平にしたような天井部となるだろう。

側部には２種類の斜格子文がある。身部との接合面は平坦合わせである。厚みは３cmもあり全長１～1.5m程度の通常の大きさの棺が考えられる。

以上のような特徴から身部があったとすれば木製のものが考えられようが，一方で蓋が出土しているので身部がなくて敷きの床面に遺骸を安置した後，蓋部をかぶせたことも十分考えられよう。このことは，玄室の空間規模から考えてもうなずける。

また，側部につけられた２通りの斜格子文であるが，同一の側部の左右で異なるものか，左右の側部で異なることが考えられるがそれを実証する破片がないので今の所判断しかねる。２棺あったことも考慮しておく必要があろう。

さてこのように特徴的な蓋部の類例は殆どといってよいほどない。部分的に見ると身と蓋の平坦合わせは吉備型である。円孔は畿内型に多い。装飾文様は吉備にも畿内にもあるがいずれの系統なのかは不明。天井部が平坦なものについては今回の調査では池ノ奥窯跡の灰原からも6片出土している。大阪府・伊勢田塚古墳例や陶邑・野々井SX4−22出土の陶棺片の例があり畿内の影響が強いのではないかと思われる。

吉備地方では総社市周辺に畿内型陶棺の影響を受けた特異な地域があり関連が注目される。いずれにせよ，この古墳が大井地区の須恵器生産集団の一角にあり県下では他に類例がないことから，須恵器生産集団あるいはその支配者たる首長が技術的，経済的交流を深めた中で畿内または吉備のいずれかの地から影響を受けたのではないかと考えられる。

壺　壺の破片は，全部で33片を数えるが，個体数としては，最低6個体程度である。

①　唯一大きさの分かる破片である。一辺22.5cm×24.2cm～24.5cm，厚み1.1～1.3cmを計る。

同心円押当具痕のある面を下面とした場合，断面は下面に向かって反って下がり両端と中心部の差は約9㎜を計る。

下面は，同心円押当具によって調整した後，側縁部は篦削りと篦ナデでさらに調整する。

上面は，一定の方向に平行叩きで調整した後，側面の一辺についてのみ，3～4㎜の幅で篦削り調整を施す。又，それに直角方向の側面の一辺には端部から約3cm内側に2本の平行沈線を引いている。

②　一辺とそれを直角にはさむ両側の二辺の一部が接合する破片である。

一辺の長さは24.2cmで右側の一辺は鈍角に広がっていく。厚みは1.1～1.2cmを計る。

上面は一様に平行叩きで調整し，側縁部から9cm内側に2本の平行沈線を引く。側縁部は，部分的に幅約3㎜の区間について篦削り調整を施す。

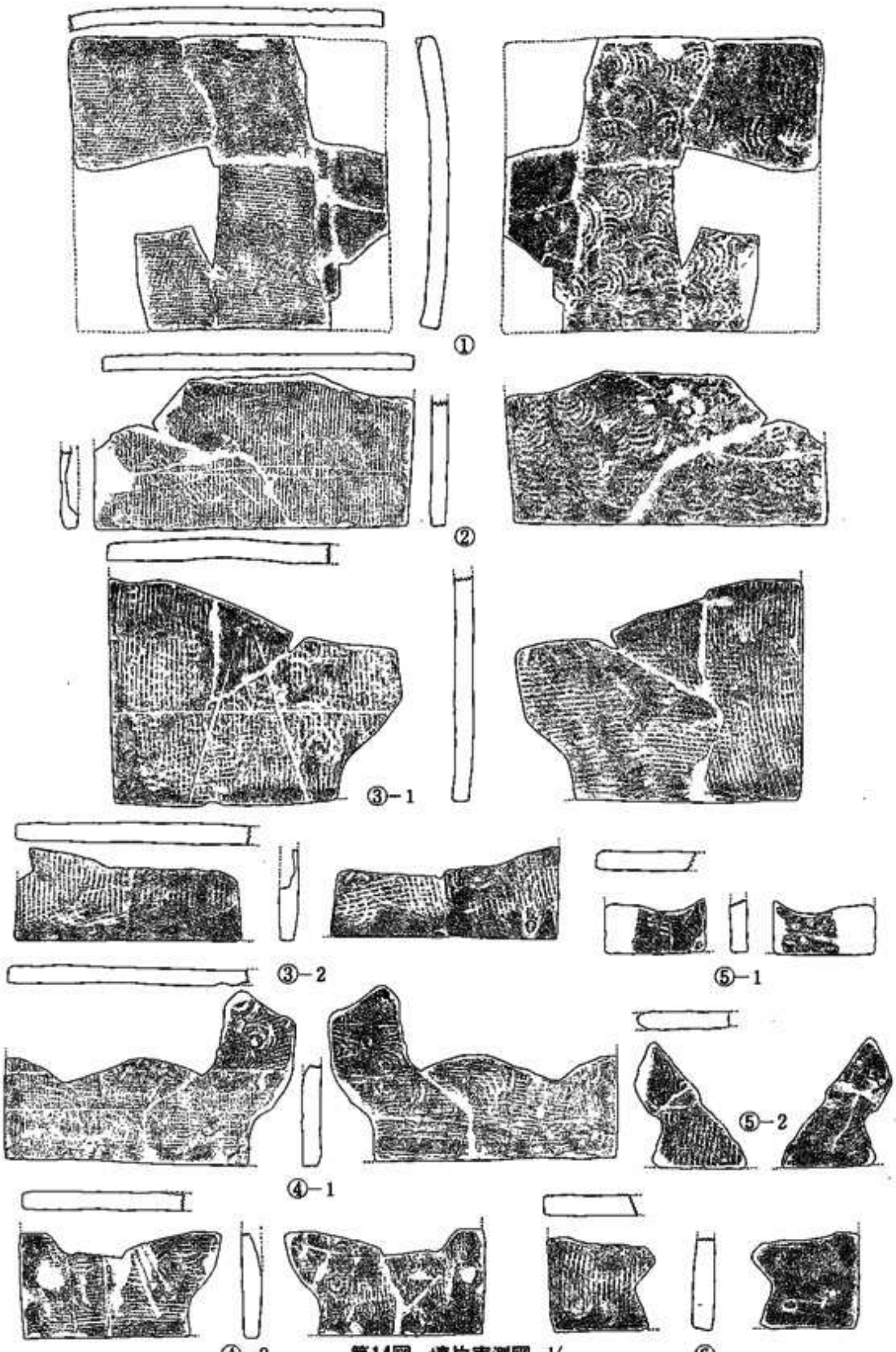
下面は，同心円の押当具による調整の後，側縁部を篦による削り及びナデ調整を施す。

③　お互いに直角をなす二辺の一部が接合する破片である。

上面は同心円の押当具と平行叩きで調整し，一方の側縁部から約7cm内面に幅2～3㎜，深さ0.5～1㎜の沈線を平行に付け，さらに同じ側縁部からそれと斜方向に交わる2本の沈線を付ける。

側縁部は篦削りで調整する。下面は，同心円と押当具を平行叩きで調整している。

この他，は，これと同一個体と思われる。



第14図　埴片実測図　⅙

④ お互いに直角をなす二辺の一部が接合する破片である。

上面は平行叩きの後，一部同心円押当具によって調整し，側縁部は1㎝余りの幅で篦削り調整を施す。

側縁部の一辺からは，8.65～8.8㎝内側に一条の沈線を引き，さらにその沈線から2.5～3㎝の間隔をあけて同じように1条の沈線を引いている。沈線の幅は，3㎜，深さは0.5㎜程度である。

下面も同様に平行叩きの後，一部直線状の指ナデで調整している。厚みは，1.2～1.5㎝を計る。

⑤ 上面は平行叩きによる成形であるが，一部に同心円叩きを施す。側縁部は篦削りを施す。側縁部は篦削り調整を施す。厚みは1.4～1.65㎝とやや分厚い。下面は調整手法不明。

⑥ 色調が黄灰色～明黄灰色で，別個体と思われる。

上，下共に平行叩きで成形している。厚みは，1.3～1.5㎝とやや分厚い。

塼は，県内初例である。県外では，大阪府南河内郡の仏陀寺古墳，大阪府堺市の牛石13，14号墳，大阪府高槻市の史跡阿武山古墳，兵庫県三田市の青龍寺裏山1号墳[註1]，岡山県山田郡の火葬墓[註2]，岡山県倉敷市矢部の江田池1号墳，同4号墳[註3]，大阪府柏原市の田辺墳墓群[註4]，大阪府堺市の野々井古墳群[註5]などで出土している。

大きさの分かっているものは少ないが，そのうちイガラビ例のような方塼は田辺古墳群中8号墓出土例だけであり，他はすべて長方塼である。田辺墳墓例は，一片が28～28.5㎝もありイガラビ例より格段大きい上，和銅開珎が10枚出土しており，8c前半頃のものである。長方塼のほうは，大きさは，10～50㎝前後までまちまちで一定していない。厚みは，1.5～9㎝まであるが，概して2～3㎝のものが通常である。

イガラビ例のように平行叩きをそのまま残す例はないようであるが，円弧叩きは，仏陀寺古墳，阿武山古墳で認められる。又ヘラ描の直線文は，仏陀寺古墳，阿武山古墳，青龍寺裏山1号墳で認められる。

以上，塼の出土例を地域的にみると，大阪府から兵庫県にかけての群と，岡山県倉敷市田辺の群の2群に大きく分布状況が分かれている。この内，本例は須恵質の円弧叩きなどの成形技法やヘラ描直線文が施されていることから，阿武山古墳や仏陀寺古墳例に最も近く，大阪方面からの直接的な影響のもとに地元窯で焼成されたものと考えられる。

大阪府下では，陶邑古窯跡群近隣の野々井古墳群や，TG220－Ⅰ，Ⅱ号窯灰原からも出土しており，こうした塼は，明かに陶邑古窯跡群で焼成され，工人集団の長の墓に使用されたことが知られるのであり，恐らく，大井と陶邑の工人集団間の技術交流の結果，大井でも制作されると至ったのではないかと考えられる。それ故，イガラビ１号墳の被葬者は，塼をたやすく特注出来る立場にいたもので自らが窯業集団を管理する長であった可能性が高い。

註

註１　奈良国立文化財研究所飛鳥資料館「飛鳥時代の古墳」昭和54年９月

註２　間壁忠彦・間壁葭子「岡山県の奈良・平安期墳墓集成」(『倉敷考古館研究集報　第16号　1987年６月所収』)

註３　安倍泰久・中岡敬善「倉敷市矢部・江田池周辺の窯跡と陶板」(古代吉備第９集　1987所収)

註４　柏原市教育委員会「田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要」1987年３月

註５　財団法人大阪文化財センター「陶邑Ⅵ」1989

追葬について　以上の出土遺物の特徴から見ると，実用に適さないミニチュアの製品が多く見られること，羨道部付近と他の地点で出土した須恵器の特徴に変化が見られないこと，陶棺と塼の出土状況を見ると須恵器のそれとは明かに違いがあるように思われる。

さて本古墳の出土遺物の中で特徴的であるのは，陶棺及び塼の破片である。陶棺の破片は，玄室から前庭部にわたり散乱していることや，玄室内の床面用材として用いられていること，また玄室床面に全く遺物が検出されなかったこと等を考えると，当初床石のない状態で構築されそこに陶棺を安置し，その後の追葬により陶棺は破壊されてかきだされ，玄室内に新たに床石を敷いて，二度目の埋葬を行ったものと推測される。

須恵質陶棺は７世紀初頭頃から用いられ，７世紀の終わりまで使用されていたものだが玄室床面の敷石下にも破片が含まれていたことから初葬段階の７世紀前半頃導入されたものと思われる。須恵器の形態的特徴は一様であったので，７世紀前半から７世紀末にかけて構築，追葬が行われたものと考える。

第1表　イガラビ1号墳出土遺物一覧表

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
A−01	石室天井部の墳土中	坏蓋(輪状つまみ)			端部不明。
A−02	石室左前1m地点(表採)	坏蓋(輪状つまみ)	15.6	2.8	受部のあるもの。
A−03	石室左前	坏蓋	11.3		短頸壺の蓋か。
A−04	羨道部天井石上(表採)	高台付坏	17.6	5.6	
A−05	羨道部(表採)	高台付坏	12.9	4.95	
A−06	羨道部	直口壺	4.8	11.1	
A−07	2区				
A−08	羨道部前(攪乱土中)	高台付坏	14.4	5.0	
A−09	3区羨道部(攪乱20cm下)	高台付坏	13.4	5.05	
A−10	西側立木根元(表採)	平底坏			糸切り痕あり。
A−11	前庭部	長頸壺	5.0	8.7	小型。
A−12	南裾須恵器群	直口壺	6.55	9.9	
A−13	南裾須恵器群	坏身	8.4	3.1	立上がり0.3，角度53.5，上外方。 篦記号あり。
A−14	2区羨道部前		8.5	8.2	胴部最大径より口径が大きい。
A−15	南裾須恵器群	坏身	9.0	3.2	立上がり0.3，角度50.0，上外方。 篦記号あり。
A−16	南裾須恵器群	高坏	9.3	6.0	篦記号。
A−17	前庭部	坏身	9.4	3.9	立上がり0.1，角度67.5，上外方。
A−18	2区墳裾	長頸壺	4.7	10.5	
A−19	3区墳裾	坏蓋	8.0	3.3	短頸壺の蓋か。
A−20	3区墳裾	坏身	7.5	2.9	立上がり0.2，角度58.0，上外方。
A−21	3区	坏蓋	8.4	3.3	短頸壺の蓋？
A−22	3区	坏蓋	8.8	3.3	短頸壺の蓋。
A−23	3区	坏身	7.2	2.9	立上がり0.2，角度54.0，上外方。
A−24	2区羨道部前	低脚坏			
A−25	羨道部	高台付坏	9.0	4.2	
A−26	前庭	坏蓋(擬宝珠つまみ)	10.4		受部のあるもの。
A−27	羨道部	坏蓋(擬宝珠つまみ)	14.7	3.5	受部のないもの。
A−28	羨道部	坏身	9.5	3.6	立上がり0.2，角度44.5，上外方。
A−29	羨道部	高台付長頸壺	6.0	10.7	小型
A−30	羨道部	高台付坏	15.0	5.0	
A−31	前庭部		8.0	10.0	口径の大きいもの。
A−34	3区	坏身	7.8	2.7	立上がり0.2，角度60.0，上外方。

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
A−35	3区	坏身	7.2	2.9	立上がり0.2，角度55.0，上外方。
A−36	3区	坏蓋	8.6	3.1	短頸壺の蓋か。
A−37	2区	坏蓋	9.9	3.9	短頸壺の蓋。端部に焼成痕あり。
A−38	2区	坏蓋	9.4	3.6	短頸壺の蓋か。
A−39	3区羨道部前	高台付坏			
A−40	3区羨道部前	坏蓋(輪状つまみ)	21.0		
A−41	羨道部攪乱土中	坏蓋(輪状つまみ)	11.8	2.1	受部のないもの。口縁部のみ。
A−42	前庭部	坏蓋(輪状つまみ)	14.6	3.3	受部のないもの。
A−43	2区№6	坏蓋(輪状つまみ)			受部のあるもの。
A−44	3区表土ビデ道	坏蓋(擬宝珠つまみ)	10.2		受部のあるもの。端部のみ。
A−45	前庭	高坏			脚部。
A−46	羨道部〜南斜面	甕	17.0		口縁部のみ。

3. イガラビ２号墳

位置と現状　イガラビ２号墳は，１号墳の東側に隣接する方墳で，一辺約７m，高さは前庭部床面から天井石上面まで約２mであった。１号墳と同じく南に開口しており，墳丘中央に1.80m×0.75mの大石が露出していたので，横穴式石室を有する古墳と考えられた。

墳　丘　本古墳は１号墳と同じく丘陵斜面を掘削して墳丘を構築する。東西6.64m，南北6.4m，高さは1.72mで，周溝は南側を除く三方で検出され，幅は最大２m，深さ0.8mであった。１号墳に接する西側の周溝は，１号墳側がはっきりしないのに対し，本古墳のそれは明瞭である。

周溝の内側には外護列石を巡らしている。本古墳の外護列石は，全周にわたって明瞭に認められた。基本的には一段積みであるが，一部石材の大小によって重ね合わせている部分も見られる。

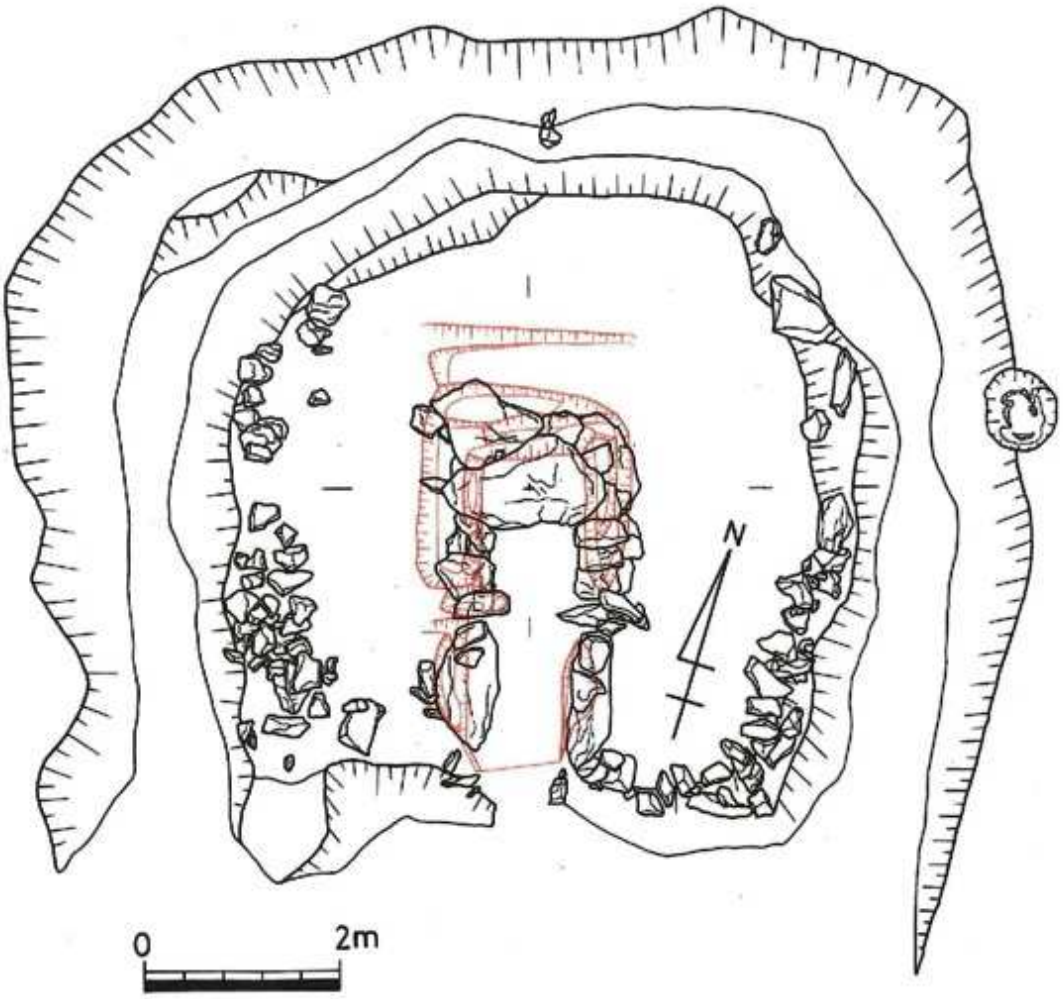
墳丘盛土は，黄褐色の土と紫褐色の土を，厚さ10cm前後で奥壁の上端まで交互に四度つきかため，更に茶褐色及び赤褐色の地山土を少しづつつきかためながら小口の石を積み上げたものと考えられる。

主体部　墳丘中央の横穴式石室の玄室は横長で横幅1.0m，奥行き1.6m，高さ1.15mを計り，天井石を１枚遺存する。床面には６枚の石を敷く。側壁は高さ0.7mの腰石を各１枚づつ立て天井石までの間は小口積みとする。石室の中軸方位はN17.5°Wである。玄門は高さ0.8m，幅0.45mを計り，左側に59×10cm，厚さ25cm，右側に48×８cm，厚さ31cmの大石を立てる。

羨道部の幅は0.9m，長さ1.5m，床面には６枚の石を敷く。側石は1.3×0.6mの長方形の大石をすえる。

天井石は最奥部の一枚を残す他は遺存していない。羨道部もまた腰石を残すのみである。玄室，羨道部内には，石室に使用したとみられる石材が落込み完全に埋没していたので，その量からみておそらく２～３段の石積みがあったものと考えられる。閉塞された状況は見られなかったことから，１号墳と同様に盗掘によって取り払われたものと思われる。

本古墳の石室の配石順序は玄室部分を先に構築したようである。まず，地山面を20cmほど堀り込んで玄室奥壁石を設置する。のち，この奥壁に両側石を立て掛けるように置き，



第15図　イガラビ２号墳調査成果図

最後に左右の玄門石を置いて玄室とする。玄門と羨道側石との間には，10cmほどの隙間がある。

側石上面の石組みは，羨道部分では，玄門側に１段の石積みが残っていた他は天井石もなく観察出来なかったが，玄室部分では奥壁の上面がほぼ天井石まで遺存していた。これによると，３～４段の内傾する小口積みの石組みの上に厚さ40cm，平面1.4×1.4m前後の大石を置いて天井としており，側石の組み方以外の手法は１号墳によく似ている。

羨門石は残っておらず，羨道部の先端は不明であるが，石室の構築されている地山面の傾斜からすると，羨道側石部分はそれほど崩壊はしていないと思われる。

床面は，玄室・羨道部分ともに張り石を施している。平均７～８cmの偏平な石を中心とするが，その大きさはまちまちで，隙間にはこぶし大の石を詰めてうめている。

遺　物　遺物は，玄室内には全く無く，周溝内と前庭部及び南側墳裾にほとんど集中して発見された。前庭部と墳裾の遺物は，輪状つまみに返りのついた蓋，甕，高坏，高台付坏，短頸壺等である。1号墳と同様に器種ごとに分けて説明する。

坏蓋　天井部の丸い，つまみを持たないⅠ類は4点出土している。B－2・6・22は口径10.2～10.8cm，器高3.4～4.1cmの比較的小型のもので，天井部は切り離しの後，かるくなでる程度の調整が見られる。B－16は口径13.0cm，器高4.8cmを計る，やや大型のもので，口縁部との境を僅かな沈線によって区画している。天井部は篦切りの痕跡は認められるが，削りはない。B－15は口縁部がやや内傾しながら高く立ち上がり天井部が平坦に近い。外面に篦削りが見られることから，壺類に付随する蓋ではないかと考えられる。輪状系のつまみを有するⅡ類は4点（B－12・25・1・20）出土した。このうちB－1は口径13.6cmを計るもので，つまみの径は小さい。B－20のつまみは，輪状というよりも中くぼみのボタン状を呈するものである。端部の残っているものはいずれも返りをもつ。

坏身　B－3・7は口径9.0cm，器高3.4cmでほとんど差異が認められない。B－29は口径11.2cm，器高3.7cmで立ち上がりのやや高い坏身である。B－24は口径14.6cmを計る。いずれも内外面回転ナデ，底部外面に篦切りの跡が認められる。

高台付坏　4点（B－10・11・13・19）出土した。B－10は口径14.8cm，器高4.15cm，B－13は口径14.0cm，器高4.8cmである。B－11はやや小型で口径9.6cm，器高4.5cmを計る。B－10は坏部内外面とも回転ナデ，内底部は静止ナデ，外面は回転篦切り痕がある。高台は貼付けている。他の土器も同様の手法である。

高坏　B－8は完形の高坏で口径12.8cm，器高9.55cm，B－17は坏部片のみで口径9.0cmを計る。B－8は坏部内外面回転篦削り，坏部内底面は静止ナデにより調整する。脚部は内外面とも回転ナデにより調整。

甕　甕は2点（B－4・5）ある。B－4は器高8.5cmを計る小型のもの。B－5はやや大きいがいずれも底部は平底に近い。

壺類　台付長頸壺が3点（B－9・21・30）ある。B－30は頸部を欠損するが，胴部最大径16.1cm，B－9は大型の台付長頸壺で，口径14.8cm，器高26.7cm，胴部最大径24.6cmである。B－9の高台は内面端に坏身の受部状の突帯があり，坏身を逆転して高台に使用した様な印象を受ける。B－18・31は小型壺と考えられる。B－26は丸底の壺の胴部であるが，頸部を欠損しており断定できないが，或は長頸壺とも考えられる。